声優回収寮

シオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
声優回収寮

【Ｎコード】
Ｎ７０８４Ｚ

【作者名】
シオ

【あらすじ】
自宅に戻ったら自宅が焼失？
嘘だろう？冗談だよな？
呆然としていた健太郎の前に颯爽と現れたのは先日アニメの撮りで知り合ったばかりのちゆみだった。
「行くわよ」
行くってどこへ？
わけもわからないまま連れていかれた先はアパレルショップで……？
声優×小説家、奇妙な同居生活始まりました。

1　録音ブースで君は興味なさげにしていた　（前書き）

※この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。
そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

1　録音ブースで君は興味なさげにしていた

本を書いて売れる。この出版不況と言われる時代にそれが出来ることは、その部数もさることながら、たったそれだけでも凄いことだと言えるだろう。

ちゆみは録音ブースの中を見ながら次回作の構想を練りながら器用にも今晩の献立を考えていた。

先日から住人が増えたために、献立を考えるのも少し楽しい。

さて何がいいかと思考を巡らせていれば奇妙な話しではあるが、次回作の構想がほぼ固まった。

「ちょっとかわった魔法使いの話しとか、どうかな」

言いつつも胸元から取り出したメモ帳にペンを走らせていく手は止まらない。

ひとりごとめいたその言葉に、いち早く反応したのは編集の一条だ。

一条はちゆみの手元のメモを見ながらどんな話しなんですかと訊ねた。

「一話二話とかの短い短編で話しが毎回完結する物語なんだけど、ただの一般人が主人公ね。この主人公が何かと言うと次元を越えてしまう……そんな話し」

「次元って言うと……異世界ものですか？」

ありがちな話しかと一条が多少浮いた腰を元に戻すと、ちゆみはちょっと違うと視線だけはメモに落としながら片手を小さく左右に振って告げる。

「小さい頃とかにさ、たまーにあったでしょ？時間を越えたり、場所を越えたり。ちょっと前まで居たのは駄菓子屋さんだったのに、気が付いたら目の前には数時間前に居た場所になっていたりとか。無かった？」

それはとても不思議な体験だと思うのだが、ちゆみはいたって平然とそれを語る。

「小さい子だとたまに体重が軽いから浮くんじゃないかって思いこみでサイキック使えたりするじゃない。階段の上から飛んで見たらゆーっくり階段の下までふわふわ落ちていったりとか。つまりはそういう小さな不思議な世界を下敷きにする感じ」

まあありがちな話しよと言われてみて、逆に今度は一条がありがちなのだろうかと首を捻る番だった。

録音ブースに向かって指示を放ちながらも、音響監督である日野が話しを興味深そうに窺っているのが見えて、ちゆみはなんだか急に居心地が悪くなってきた。

こんなところで打ち合わせなんてするべきじゃないよなあと思いつつも、打ち合わせなんて段階でもないのでまた違うか、とも思いつつ、どうしたものかと呻く。

「なら、次元って何を指すんですか？」

音響監督ではなくて、今度はアクターについてきていたマネージャーの一人が首を突っ込んできたようだ。ちゆみは益々話しを止める機会を失ってしまったようで、しどろもどろになりながらも口を開く。

「えっと……空間だったり、時間だったり。その時それぞれ変える感じ、かな。いつも気がつくと目の前の景色が変わっているような主人公で、仕事――もしくは学生でもいいかな？学生だとしたら帰りの道を真っ直ぐ走って寄り道をしなかったのに気がつくと目の前は断崖絶壁の海があるの」

ちゆみがメモに書き殴りながら話しを続けていくと、気がつけばアクター達のマネージャーだらけになっていた。

周囲を囲む人垣に、ちゆみはなんだか圧迫感が酷いなと思いつつ続ける。こうなればもう自棄である。

あまり人前が好きではないのだがと思いつつもちゆみは考えついたばかりの物語を語っていった。

「そこにはコンビニも何もなくて、灯りもない。だから最初本当にパニックになるんだけど、主人公は小さい頃からそういう突然の事態には慣れていたわけね。だから、そこまでパニックにならずにすんだの」

「あまりそれは……慣れたくないな……」

「まあ、そうかもね。少し自転車――もしくは車に乗っていて景色が変わったのでもいいか。運転していくとコンビニを見つけるの。そこで住所を聞いてびっくり。そこは二つも県を跨いだ場所にある、港町だった。けど、どんなに騒いでも仕方ない。移動させられたか移動したかしちゃったんだから、腹をくくるしかないって思って、そこから……自転車の場合は列車が出る時刻を待って、何とかして戻ろうとする。そして車だったら夜通し駆けて戻る――主人公はそんな毎日を送っていたの」

何とも壮絶な話である。

「なんか……大抵の場合って、魔法使いって最初に設定としてある

んなら、意のままに操れそうですけどね、移動先とか。まあ、ある程度の不自由さとか、魔法使いとしてそこまで力が強くないだとかで移動先が多少ずれる程度はありそうですが、そこまでの不自由さって、ただただ面倒そうなだけですけど」

一条がそう告げると、ちゆみはそこでくすりと笑う。

「不自由だから面白いんだよ――でね、そんな毎日だったんだけど、ある日やっぱりまた移動しちゃうんだよ。仕事してたりしたら、もしくは学校で授業中に……ぱっとね。すると目の前にあったのは過去の世界だった。ある日は異世界のお姫様が殺されそうになっていた。ある日は処刑上のど真ん中に飛び出した――とか。毎回とんでもない話しに巻き込まれるようになっていって……少しずつ世界の理不尽さを正していく物語」

「……理不尽さ？」

「っそ。飛んだ先でー……たとえばそうね、人の命が塵一つよりも軽いものだとする。主人公は真っ直ぐな性格なんだと思う。だから、そんなのおかしいって異を唱えるわけね。そしてそこの世界に波紋を投げかける。すると戻れた世界の中で、ちょっとした違和感を覚える様になるんだ。人がなんだか一人一人、優しく穏やかになっている、とか」

「あー……もしかしてですが、それは別の世界と思われている世界と、何らかの形で主人公を介して？になるんですかね――繋がっている？」

音響監督が仕事をしながら話しに完璧に首を突っ込み始めたのを苦笑しながらちゆみは頷いた。

「主人公そのものが謎の塊で、世界は彼ないし、彼女を介して全て繋がっているの。だから主人公が世界はもっと優しくあるべきだ！

って別の世界に対して理不尽さに対して異を唱えて、それを叶えるために動く。すると世界が主人公に屈した時、元の世界も屈するのね」

「……なんだか、最初はちょっと変わった魔法使いの話しとか言うので、もっと小さな話しかと思っていましたが……全然違いましたね」

一条が背もたれに疲れたようにどっしりと座りなおすと、未だ話しについていけない部分があると食いついて来る。どうやらめっきりと見せられてしまったようで、ちゆみの話しをもっと細かく聞きたい様子だ。

そしてそれはアクターについてきたマネージャー達も同様の様子で――困ったことにアニメの関係者達も同じようだった。

そして、どこに隠れていたのか、ちゆみの席の背後からひょっこりと顔を出した監督とプロデューサーがちゆみの前に首を出してきて、もっと詳しく話しが聞きたいんだけど、といった。

「あ、れ……西脇監督に小田プロデューサーまで……今日は来れなかったんじゃあ……？」

すると監督とプロデューサーは挨拶だけはしに来ないとと思ってきたのだがと言う。どうやら大変忙しそうな中、こちらまで出向いてきたようである二人に、ちゆみは恐縮しきりである。まさかわざわざ自分に挨拶をしにくるためだけにここまで足を運ばせたのかと思うと、いっそ悪い気持ちにさえなるほどだ。

「いやいや、来て良かったよ！貴重な話し聞けたしね。……その話しってもう連載確定なんですかね、一条さん」

「え？」

ちゆみは何を言っているのだとぽかんとしているが、監督――西脇も一条も真顔である。
なんとも冗談なような話しではあるが、西脇はこれを連載とほとんど同時進行でメディア化したらどうだろうかと言うのだ。
「嘘……いや、だってね？今作ったばかりの話しですよ！？面白いか面白くないかだって、市場の反応だって出てないのに！」
そもそも連載が確定しているわけではなくて、ただのネタ出しの段階である。面白いか面白くないか、大衆が判断するのは市場に出回ってから結論が下される物に対して、先にネタの段階でのメディア化を打ちだされてもむしろ困る――よりも戸惑うばかりだ。
ちゆみは無茶苦茶だと言うが、今作である『君を求める僕の恋愛遺伝子』は増刷に次ぐ増刷である。
この本はハードカバー本として格調高い本に一見すると見えるため、どうにも手に取りにくいものがあるが、その実読み口はとても軽やかで、存外読書離れが進んだ若い層ですらも手に取った。
お陰で今では文庫化、漫画化、朗読ＣＤ化、ドラマＣＤ化――そして現在、アニメ化のために第一話の音源を取りこんでいる最中だ。
ドラマ化の話しもきたらしいが、同じ映像化でもアニメ映像と実写映像とでは全く違うため、ちゆみが一度断った背景があるのは秘めごとである。
物語の登場人物を演じる声優により、キャラクター達への息吹が吹き込まれていく。そんなある意味では不思議な場面を見せられてほうっとしていたかと思えば、急に現実的な考えを突きつけられたようにも思うこの一幕は、後に重大な事件となるのだった。

2　二次会に出向いた先はやっていなくて

声優さんって普段からこんななのか。

役者とは初めての付き合いであるため、どうにも勝手が分からない。

飲み屋で第一話の撮りが終わったため、打ち上げをしようと言うことで、西脇や小田に連れられやってきたのは少しこじゃれた居酒屋である。

清潔感があり、最近の居酒屋はこういうのなんだなあとちゆみがつぶさに周囲を観察しているのを見て、主人公の友人役のアクターである林田健太郎が興味深そうに話しかけてきた。

「何見てるんすか？」

「んー……働いている人と、飲んでる人と……お店の中身」

心ここにあらずといった様子でぽつぽつと語るちゆみに、健太郎は何とも言いようのない手ごたえの無さを感じる。

俺と話してるんだよね？――思わずそう言いたくなるが、相手はある意味雇い主とそう変わらないこの作品の生みの親である。

せめてこっちを見てくれればいいのにと思うが、健太郎は適当に愛想を良くし、相槌を打つ。

「見て……何かに使えるんすか？そういうのって」

「まあ、そりゃね、使えるよ。次の話し、またメディア化みたいなんだけど……話しまだ書き始めてもいないのに……嫌になるなあもう。うんと、だからメディア化のそれなんだけど、……結局時々ぱーって飛んじゃうわけじゃない？だとするとさ、飲んでた最中飛ぶ

こともあるはずなわけで……そうすると、じゃあ何を飲んでたとか、なんていうかなあ……社会人だった場合で今は考えてるけど、そういうパターンもありかなって見ながら考えてた」

ぶつぶつとメモを取りつつ周囲を観察している様子のちゆみにたいし、健太郎は一種不気味なものさえ感じていた。

一体こいつは何を言っているのだと当惑していれば、ちゆみは二つほど脇の一条の席まで突然這っていったかと思うと、学生のほうがおいしいね！！などとのたまう。

「わけわからん……」

健太郎としては作品の生みの親ともなると、これは仲良くしておくべきだろうと思い話しかけてみたわけなのだが、その歩み寄りは無駄に終わったようだ。

ちゆみは完全な自由人だ、そう確信した。

あれでは会話など成立しないに違いないと頷くと、適当な席に座り直す。

するとマネージャーである川治順平がすっと隣に座り、肩をぽんと一度叩くと、悪かったなと言うのだ。

「何すか？」

「いや、こっちの話しだから気にしないでよ。それよりおかわりいる？何飲む？」

「え……じゃあ、その、生」

＋＋＋

いい感じで全員が酔いがまわったところで、西脇がもう一軒行こうと声高に叫ぶと、明日が早いと言う声優とそのマネージャーは申し訳ないがと二次会の席は断りを入れて帰宅した。
ちゆみは一条がまだ煮詰められるならばと言うため、この後も付き合うことに決めたらしい。
西脇と小田が行きつけの居酒屋があると言うことなのでそちらに全員で向かうことになった。

「……あいてない」
「今日定休日ですか？」

ついて早々に空ぶりになったわけなのだが、全員がもう「飲むぞー！」と勢い込んできたため、空ぶりに終わって相当悔しい思いをしていたらしい。
だが、時間も時間のために余所を探そうにも厳しいものがあった。
悔しいが今日はこれで解散かと西脇がしょげていると、順平が手元の手帳をめくって何やら考え込んでいる。

「じゅんぺー、もしかして明日の予定とか気にしてるの？」
「ああ、うん。明日のって言っても、俺のじゃなくて、皆のだけどね」
「ふうん？」

ちゆみが順平の手元を見つめていた手を、そのまま一条まで戻すと、なんならうちにきませんかと誘った。

「煮詰めるならうちでも出来るし。いつものなら用意出来るよ」

こちらはアルコールをほとんど入れていないからなのか、頭がしゃんとしている二人のようで、ならそうしますかと一条とちゆみが

二人でこの面子から別れようとした時だ。順平が言うのだ。

「俺らも駄目？」

普通であれば何を戯言を、と言う状況かもしれない。

何せ大所帯である。

監督、プロデューサー、音響監督、音響スタッフ、宣伝スタッフ、声優数名、そしてそのマネージャーだ。十名を軽く超える面子が揃っているところでのこれであるため、あまりにも呆気なく申し出られたこれに対して西脇はあんぐりと口をあけてしまった。

却下に決まっているだろうに、何を馬鹿なことをと思い、声優たちも順平に対して「無茶っすよ～」と冗談めかして言ってみるが、あまりにも洒落にならない。相手によってはたったそれだけで、関係が劣悪化するに決まっているだろうに、ほぼ初対面のようは間柄で申し出ていいレベルを越えていた。

だが、ちゆみはこれに対し、考えることもなく間髪いれず言うのだ。

「いいよー。用意してないから、帰宅してから作るようだけど、遅くなっても怒んないならー」

あっけらかんと言われた言葉にも唖然とするが、他の面子に対しての言葉遣いとあまりにも違い過ぎる順平との会話に使われる言葉づかいに、更に唖然とする。

「いや、……っつかこの人数だけど、ほんとにいいの？」

「うんー。だってよく集まるし、今日は食材も余分にあるから作れるよ。お酒も皆くれるもんだから余ってるし、飲んでってくれると助かる～」

ちゆみはにこやかにそう言い放つと、思い出したように手をパンと叩き、いそいそと携帯を取り出すとどこかに電話をかけ始める。
一体どこにかけ始めたのか、ほどなくして繋がった回線の向こう側からは、可愛らしい少女の声が聞こえてくる。

『ちゆみさーん！遅い！何やってるんですかぁ！』
「打ち上げしてたから電話するの遅くなっちゃった。ごめんね」
『ぶーぶー！スーパーいってきてって言うからいってきたのにぃ！無駄なのこれぇ……』

しょんぼりとした声音がちゆみの耳朶を打つが、そんなことはないよと慌てて告げられたちゆみの言葉に、受話器の向こう側の少女の声は浮足立つ。

『あはっ！良かったぁ』
「それで、これから帰るから、もうちょっと一人だけど……大丈夫？」
『はい！大丈夫です！じゃ、待ってますね！』
「うん。じゃ……」

電話を終えるとちゆみは、食材の確保はオッケーみたいですと告げて西脇と一条を両サイドに従えて、一路自宅へと向かった。
そんな中、よった頭で音響監督は考えていた。

さっきの声って、もしかして……

3　彼女の家から出てきた美少女？

ここが家だよとちゆみに指差されたほうを見てみれば、そこには門から決して近くはない所にある、最近建てたものと思しきデザイナーズ仕様であろう、大きな一軒家があった。

一人暮らしの女の住まいとして――というよりも、普通の一般家庭の家よりもそれはとても大きい。ゆったりとした大きさに、なんだか余裕を見せつけられたように思い、全員がうっと一瞬息をつめたように空気が重くなったほどだった。

部屋数は聞いていないため分からないが、一応は都内に土地を所有した上、更にはそこに自宅を建ててあるのだから驚きである。

「借家でも何でもないの？」

そう恐る恐る訊ねる西脇に、ちゆみは土地も家もお金をためて買ったんだとさらりと告げる。それは嘘とは思えないほどに、言いまわしは軽く何気ない風に聞こえてなおのことうっとつまった。

「うっわ、若くて土地持ち、更には家持ちとかって本気かよ……」

思わず健太郎がそう呟くと、脇で順平が家が欲しいならその分死ぬ気で頑張らないといけないけどねと苦笑している。

「死ぬ気でって……」

確かに声優という仕事で、それも東京都内でそれだけ稼ぐには相当頑張らなければならないだろう。

芸能人である以上、人気が物を言う部分が大きい。そこを指して言っているのかと思ったが、順平の顔を窺うとどうやら違うようで

ある。どこか悲しげな瞳をしていてなんだか言葉に詰まってしまった。
ちゆみが玄関扉をあける前にしたことは、厳重にも土地のセンサーをカードキーで一旦切って土地の中に侵入し、そこから更に扉の前に行くと、携帯電話で中に居る先ほどの少女へと向けて一報を入れたのだ。
何とも念入りなとは思うのだが、ちゆみ曰く「最近物騒だから」だそうだが、年間でいくらかかっているのか、このだだっぴろい家を、と考えると想像するだけでも恐ろしい。
警備費用だけでもこの家の大きさに土地の広さからいって、相当かかっていることは想像に難くないからだ。

「都内で別に一等地ってわけじゃないが、セコムに入ってる上、これ……相当警戒しないといけないってのがちょっと辛いかもねえ」

金持ちってのも大変そうだと嘯く大畑は、アニメの原画家である。
大畑が肩を竦めてちゆみに続いていくのを見ながら、順平がぼそりと言った。

「つけたのはそういう理由からじゃ、ないんだけどね……」
「……」

健太郎は何も言わず、順平についていった。
なんだか奇妙に感じるその言いまわしを深く勘ぐってみたところ、順平はもしかするとちゆみと交際をしているのか、と思った。
そしてもしかしてここには通い慣れていて事情をよく聞き知っているからなのか――とも考えたが、まあいい。気になるなら聞けば良い話しなのだから。
とりあえず今のところはその考えは一旦脇に置いておくことにした。

「ちっゆみさーん！！」

扉が勢いよくあいたかと思えば、飛び出してきたのは可愛らしい少女――ではなく、二十代前半――ないし、後半はいってそうには見えない、妙齢の女性の姿だった。

がばりとちゆみの首に飛びつく勢いで飛び出してきた女性に、ちゆみは、よくできましたとばかりに頭を優しく撫でてやる。

まるで飼い主と犬のような間柄を彷彿とさせるそのやりとりに、呆気にとられていた西脇は、女性の顔ではなく、声を聞いて思い出す。

「鈴宮……お前、こんなところで何をしてる？」

なんでこんなところから出てくると言われて鈴宮千枝はようやく西脇達の姿に気づいたようだ。

「……っれ？なんでこんなところに西脇さんがいるんですか？」

首をかくんと傾げて子供じみた動きで千枝はおかしいなあと言う。

二人はタイムラグがあるものの、全く同じことを考えたようだった。

「そりゃこっちの台詞だっての」

＋＋＋

リビングに落ち着いた面々は、早速くだらない話で盛り上がってり始めているようだ。
それを見ながら千枝は料理をテーブルに並べつつ、皆お酒飲み過ぎですよと眉根を顰めて言う。
実際に千枝が眉を顰めて言うほどに、それはそれは飲み過ぎと分かるほどに彼らは全員酒臭かった。

「いやあ……久しぶりの面子が多くてさ？」

元から今日集まった面子は、声優に限って言うなれば元は同じくらいのデビューだったため、近しい者達の集まり程度には気軽な間柄ではあったのだ。
お互いデビューしたての頃はマネージャーもつかないような下っ端だったが、今や押しも押されぬ人気声優である。そのためこの作品での初撮りともなると、マネージャーも気合が入っているのか、全員参加だ。
互いの過去を知っているだけに大いに盛り上がったのだと千枝に口ぐちに言う声優たちに、成る程と納得した様子で頷いた。
千枝は最近流行りのアイドル声優と言うやつだ。歌って踊ってライブも開く、そんなアイドル声優とも言うだけに、顔は可愛らしく整っている。一見すれば入社したての可愛らしいＯＬかぴちぴちの大学生で通りそうだが、実際はこの業界に入って三年目の若手声優だ。
声も十代のような可愛らしい声で、下手をすれば小学生と言って電話をかければ、相手はそれを信じ込んでしまうほどの声の持ち主だった。
事実、勧誘の電話に小学生のふりをして断ったことがあると以前笑いながら言っていたのを順平は思い出した。
そんな千枝の可愛らしい声に健太郎はそれでお前は何でここに居るんだと訊ねた。

自分達は監督たちと飲み会としても、千枝はこの家に何故居るのか、なんだか妙に気になって突っ込んで話しを聞きたくなった。

「ええ？あー……えっとぉ……」

けれど千枝は答えにくいのか、言葉を濁して足を一歩引いて、二歩引いて――気がつけば変態！と罵られて逃げられてしまっていた。

「何で変態なんだよ！」

流石にただ問い詰めただけでその言い草は無いだろうと思ったが、千枝はちゆみのいるキッチンまで下がるとそこから舌を出して更に口汚くののしり始めたのだ。

「いーっだ！変態変態！乙女の事情に首を突っ込むなんて、変態じゃないですかぁ！もう、林田さんったらやらしい！さいってぇ！」

「はああ！？」

突然のこのやり取りに対して、今度は健太郎が話しの的になった。

「なになに？健太郎何したの？千枝ちゃんいじめたの？」

西脇に小田にと声優たちの酒盛りの間に割ってきたかと思うとにやにやと嘲笑うように言うのだ。

「おいおいおーい、ちえりんいじめたらお前やばいよ？明日あたりブログ炎上よ？分かってるの？死にたいの？闇討ちされるよ？」

勿論それは鈴宮千枝のファンである方々に、だ。

「鈴宮さんの人気って言ったら今きてますからねえ。ほんっと、やばいんじゃないですかあーん？」

お前オタクの怖さ分かってるのかと自らもオタクを公言してはばからない西脇がからからと笑いながら言う。完全に出来あがっているようで、西脇は笑い上戸が止まらないようだ。酒瓶を掴んだままに笑っている。

よく見ればそれはくどき上手、命と書かれた日本酒だった。

日本酒を今瓶で飲んでいるが、先ほどまでの居酒屋では焼酎、ビール、日本酒も瓶であけていたことを思い出す。

あんた絶対飲み過ぎだ。

4　気になる前で終わりにしておこうと誓った

「こ、怖いこと言わんでくださいよ！！」

健太郎は身を庇うようにして二人から引くが、他の声優たちがマジで炎上とかになったらどうするんだとこちらも面白がってはやし立てる始末だ。もう完全に健太郎をいじる標的と決めたらしい面々に、ほとほとあきれ果てる。

玩具になんていい歳になったのだからなりたくはなかった。

「あーもー！勘弁してくださいよ！！」

がばりとその場を立ちあがると、そのまま千枝を追って健太郎はキッチンまでやってきた。

「おい、鈴宮」

「……なんですかぁ」

健太郎は上背が百八十を越える長身の男であるため、千枝と並ぶとその差に驚く。

千枝は声も可愛らしい少女のような声だが、その背丈も大変小さく可愛らしい。百五十あるかないか程度ではないだろうか。健太郎が千枝の前に立つと、千枝のつむじが見えるほどだ。

ちゆみが包丁でカットしたばかりのチーズを皿に盛り付けていると、そんな二人に向かって絵になるねと、ふいにだったが、ちゆみはいたって素直な気持ちで呟いた。

「えっ！？」

千枝はその言葉に一瞬どきりとする。

そして驚くことに千枝は包丁を片手に料理を作り続けるちゆみの背に飛びつくように抱きついたのだ。

「うわっ！危ないよ？」

ちゆみが手元の包丁を置いてどうかしたのかと振り返り千枝を覗き込むも、なんだか千枝の様子がおかしい。

健太郎が僅かに震えているように見えた千枝の背にそっと手を伸ばそうとするも、ちゆみがそのまま健太郎との間に壁になるように身体の位置を入れ替えてしまうと、千枝の顔を覗き込んだ。

不安定に揺れた千枝の瞳を覗き込み、そして何故千枝が微かにではあるものの震えだしたのか悟ったらしく謝罪の言葉を紡ぎ出す。

「不謹慎だった……ごめん、謝るよ」

「いえ……平気です」

平気と言葉には言うがその肩はまだ細かく震えている。

安易に発してしまった言葉にちゆみは後悔しながら、千枝をそのまま抱きしめ、その背と頭をぽんぽんと撫でてやる。

そして思い出したかのようにちゆみは背後を振り仰ぐと健太郎に言うのだ。

「ごめんね、ちょっと今……わけありなんだ。……ああ！でもね、別にこの子に悪気はないんだ。許してよ」

「いや、その……はあ」

健太郎は曖昧に返事をすると、そのままそこで突っ立ったままに、

いいですけどとぼそりと呟く。
最初から妙に気になってはいたのだが、自宅に戻ったちゆみは、重いと言って縁の大きな野暮ったい眼鏡を外すと、今度は顔全面にほとんどかかってしまっていた髪を結いあげて料理を始めたのだ。
そこで露わになった面に健太郎は釘づけになった。

綺麗な人だなあ……

そんな感想を抱くと同時に思ったことは、大変残念な人だ、である。
目鼻立ちもくっきりしていて、どこか外国の血でも入っているのかと思うほど彫も深い顔立ちが眼鏡とおそらく数か月は美容院に行っていないだろう髪の毛のせいで全体的に野暮ったくなってしまっている。
眼鏡の一つを取り払い、その無駄にもっさりとした印象を与える髪さえどうにかしてしまえばいいのに、伸ばし放題の髪のお陰で容姿どころかその全体を暗い印象にしている。
それこそ勿体無いにも程があると言うものだろう。
眼鏡を止めればいいのにとやっぱりこれも他の面子から声があがったわけなのだが、出かけるときは本当はコンタクトなのだそうだが、今日は出がけに失敗したらしいとはちゆみの言である。

「ちょっと書いてたら止まらなくなっちゃってね……気が付いたら一条さんとの待ち合わせ時間迫ってて、だから慌てて着替えていったから眼鏡だったんだ。髪も何もやってる暇もないし……ほんと、電車にも遅れるしちょっと今日は散々だったの。まあ、一応いつもは身ぎれいにしてるつもりです」

と、言いきったはいいものの、たぶん？と首を傾げているのでそれもあてにならない話しと思うことにした。

そもそもあれだけざんばら頭を伸ばし放題にしている時点で身ぎれいにしているとは思えなかった。
共に酒盛りが出来るわけもないのだが、ちゆみは料理を作るのに忙しなく働き、キッチンから出ることはない。
更には話しをすることもないのでどんなに皆ちゆみが気になっていても、ちゆみの方へと話しを振ることが出来ないのだ。
順平との間が気になりはするものの、聞くに聞けず、更にはアプローチらしきものもすることが出来ずと気を揉んでいるうちに健太郎は音響スタッフに捕まって酒盛りの真っただ中にまた、連れ去られていった。

「はいはいはーい！お待ちどうさまー！」

そう広くもないせいぜいが四人掛けのテーブルに次々と並べられていくのはあの短時間で作ったにしては豪勢な料理の数々だった。

「すんごく美味しいから、食べてみてみて？」

元の明るさを取り戻した千枝は、自分で作ったわけでもないのに我がことのように料理を持って食べるようすすめてくる。何となくそれがむっとして、健太郎はお前が作ったんじゃないだろうと突っ込んでしまった。
けれど千枝はそんな言葉に怯むことなく満面の笑みだ。

「だーかーらっ、美味しいの知ってるからさ！ほんっと……おいしーから！同意して欲しくて！だから食べてくださいよ！うひひ、ほっぺた蕩けちゃうんだからね！」

にっこにこの満点笑顔で言われてしまえばなんだか気に食わなか

った。
その発言から分かってしまったのだ、千枝がどれほどちゆみの手料理を食べることが出来ていたのかを。
なんだかそれが羨ましくて憎たらしくて――その苛立ちを隠すように健太郎は箸を手に取り料理を口に運ぶのだ。
ぱくり。

「んっ！？」
「何だこれ！うめえ！」

口に運んだ途端に全員が酒ではなくて料理に食らいつき始めた。

「うっは、スープうめーっ！何これ？野菜とこのぷりっとしたよく分かんねえのなに！？」
「ゴーヤチャンプルうめえええ！っていうか苦くないよなこれ。新種？旨いんだけど」
「この白いの何？チーズじゃないよね？チーズ？？」
「鶏からジュウシィイイイ！」

先ほどまで酒ばかりかっくらっていたのが嘘のように、箸をつけ始めた途端に止まらなくなってしまった。
ちゆみは作る端から皿が消えていくなと呟きながらもさくさくと次を作りだしては運ぶように指示してくる。その様子はまるで本職の料理人のようだった。
油のじゅうじゅうと言う香ばしさを感じさせる音にフライパンの上で踊る野菜の蹴立てる音にと、聞いているだけでも料理を作るのを手慣れているのが嫌でも分かる。それほどまでにちゆみは安心して見ていることの出来るほどの料理の腕を誇っていた。

「つか何これ？オリーブオイルに何混ざってんだろ」

白いチーズのような塊を口に運んでは首を傾げていれば、順平がそれは塩豆腐だといった。

「塩豆腐？」

「最近流行ってるらしいよ？豆腐を塩で水抜きするでしょ？んでちょっと塩味ついた程度になってるから、そこにオリーブオイルと山葵をといたものをつけて食べるの。んでも俺の場合はこれにバジルソースかけるのが好き。スーパーとかの調味料のところにあるじゃん？ソースとかドレッシングとかの中にバジルソースって。あれかけて食べてもよくあうんだこれが」

箸で一切れ掬って口に運ぶ順平に、健太郎も倣う。旨い。

「はいはいはーい！私もバジルの好きー！」

千枝が今度はそうめんを運んできたようだ。

つけ麺にして食べるようにと出されたスープが具だくさんでこれまた美味だった。

先ほどのゴーヤチャンプルーもそうだが、こちらもゴーヤが使われたつけ麺である。けれどこれまた不思議なことにゴーヤの苦みは強くなく、アクセントといった程度しかついていないため、病みつきになる苦みといったところか。兎に角これまた美味いのだ。

ボウルに山と盛られた麺は、箸で取りやすいようにと一束ずつ分けられ盛られていて、ちゆみの心遣いが見える。どかっと茹で上がったものをそのままだったらおそらく酔っ払い共がテーブルの上に麺を大量に取りこぼしていたことだろう。

綺麗に盛られた麺はつやつやと輝いていて食欲をそそる――が、そろそろ腹八分目といったところか。

つるりと一口恨めしそうに啜ってぽつりと呟いた。

「麺で食いおさめかもなー……」

大変美味な料理が次々と運ばれてきたわけなのだが、如何せん問題があった。

西脇は、はあと大きな溜息を吐き出す。

「どうせならもっと美味しく味わいたかったなあ。一次会の居酒屋が響いてあんま食べらんないのが悔しい」

本当に悔しそうに言うため皆が苦笑している。

居酒屋の冷凍ものも入ったメニューと、一から手作りの料理。どちらが良いかと言われたらもうそれは当たり前だろう。

「食い意地はり過ぎじゃないですか？」

「うっせーよ！そんだけうまいんだって」

ちゆみが最後と大皿を運んで来た時にそれを耳にしたらしく、なんなら今度ここでパーティをやろうかと言う話しになっているからどうかと誘った。それには一条がきょとりと目を軽く見開き大丈夫なのかと訊ねる。

「あんた人が多いの嫌いでしょうが」

そうなんだけどとちゆみは空いた皿を片付けながら言う。

「んー……でも美味しく食べてくれる人好きだし。いいかなあって……」

「まあ、あんたがいいならいいけどさ」

一条は酒をちびりと舐めるように飲むと肩を竦めている。どうせ開かれるのはちゆみの家である。ならばちゆみがいいと言うのだから、一条が反対しても意味が無いということだろうか。
一条が構わないということで、ちゆみは他の参加者がＧＯサインを出してくれたと西脇に再度誘いをかけた。

「狭いけどここには庭もあるし、バーベキューもいいよねって思って。一条さんとこの編集長さんもやっぱり西脇さんみたいに言ってくれたから、じゃあ今度やりましょうかってことになってるんですよ。食事会。なんでしたら西脇さんもどうですか？」

狭いけどと言いつつも、ちゆみの持ち家であるこの家屋は相当広い。
若くしてこれを一人で建てたのだとすれば相当だと唸るほどにそれは大きな建物で――それは謙遜が過ぎると苦笑しつつも西脇は言った。

「是非ともお願いしたいね。邪魔じゃなければ参加したいよ」

その言葉に我も我もと続き――気がつけば『君を求める僕の恋愛遺伝子』の関係者がほぼ全員集まっての大きなイベントになることが決定してしまったようだった。

「そ、んな大きなイベント、こんな狭いところでただの家庭料理でもてなしても構わないわけ？！」

流石に途中から大所帯になり過ぎたため、言いだしっぺであるちゆみが泡を食っているが順平がまあまあと取りなしはじめた。

「いいじゃないの。いつも人なんてここ、よりつかないんだし。た

まには人と触れ合おうよ」
「ええ～……何だよ、人を引きこもりみたいに言って……」
ぶつくさと文句を言いながらもちゆみはその一言でまあいいかと思いなおしたらしい。
なんだかそれが健太郎には気に食わなかった。
「監督の言葉よりもただのマネージャーの言葉のほうを聞くとか……なんか……」
変なのと、誰に聞かせるわけでもない、小さな呟きが吐き出されて酒臭い息と共に周囲の空気に混ざって消えた。
後に残ったのは不完全燃焼なこのもやもやとした気持ちだけだ。

わけのわからないこの都心にある大きな家に住むちゆみに、その脇に当然のごとくいる千枝。そしてちゆみの付き合っている相手なのか、順平の存在も謎すぎた。
自分の所属する事務所の単なるマネージャーなのだから聞けばいいとは分かっているものの、妙なものだが自尊心が邪魔をして聞くに聞けない。
まあいいか、どうせ当分女なんていらねえって思ってたし。
気になる程度で終わらせておけば面倒なことになるはずもあるまいと高をくくり、健太郎はちゆみの家を後にした。
「は～。次は打ち上げの時って言ってたっすけど、また食べたいなあ。最後に出てきたやつ、ほっとんど西脇さんの胃袋ン中じゃないっすか。入らない入らないっつって、ほっとんど胃袋におさめちゃ

ってさー？俺なんて一口二口程度っすよぉ？全然味わった気、しねえもん。美味かったから尚更悔しいー！！」

次は絶対にたらふく食べようと豪語する声優仲間に健太郎は苦笑すると、まあその日まで相手の仕事柄上、道端でばったり再会なんてこともなく、当たり前のように会うこともないだろうと考えていた。

それまでには今日のこのもやもやした感情もどこかにいくさと気楽に考えていた健太郎は、早々にそれを裏切られることになるのだった。

「ま、それまで撮り頑張りますか！」

「おー！」

5　トークイベントから戻るとそこは

健太郎は今朝からみっちりと働かされているため、まだ陽のある明るい時刻だと言うのに、既にしんどいと車中でぼやいた。乗り込んだ直ぐのこれに順平は苦笑してしまう。

「お疲れ様、健太郎君。んじゃ出すからシートベルト締めてね」
「うぃーっす」

シートベルトを腰に巻き付けて行儀よく座る。これから向かう先は次の仕事場だ。
運転手を買って出てくれたのは昨夜からまた顔をつきあわせている順平である。
マネージャーを今日は三人兼任しているわけかと思うと、この業界は声優だけでなしに今はどこも人手が足りないらしいなあと、健太郎は妙な所に意識がいった。
先日テレビを見ていた時にお笑い芸人達が言っていたのだ、「俺と新人芸人のマネージャーは兼任なんですよ」と。他にはお笑い芸人とタレントを三人ほど受け持っているマネージャーなどもいるらしく、どこも人が足りなく、大変な思いをしていることを知った。
まあ、声優業界はそれ以上にマネージャー不足が深刻だが――順平が助手席に置いてあったペットボトルを放って寄越しがてら言う。

「台本は後ろにあるからね。向こうについたら直ぐにミーテ入るらしいから。急いで頭に入れちゃってくれる？」
「へいへーい」

今日は新人として今年入ったばかりの声優である野口と、移籍し

てきたばかりのベテラン声優である岡村と、最近流行りの乙女ゲームのイベントに駆り出されている。健太郎、野口、岡村の三人も参加している乙女ゲーム、そのトークイベントである。
お陰で車中はみっちりとつまっていて男四人なため狭いわけなのだが、それでも気にならないくらいには快適だった。順平が車の運転が上手いのがその理由の一つだろうが、健太郎は今日の収録がどこもかしこも声優の人数が多く、狭い収録スタジオの中がどこも満員御礼状態だったからだろうとも思った。

「先輩、はいこれ、台本ッス」
「サンキュ」

野口から手渡された台本を手に取り、中身にざっと目を通し始める。

「俺こういうイベント初めてだから、少し緊張してます」

照れたようにはにかみながらそう順平と話している野口を微笑ましそうな目で見ていれば、岡村が現場でとちるなよと、そんな野口に茶々を入れるように少しばかり意地の悪いことを言っている。岡村もなんだかんだ言いつつ緊張してるものだから、どうにかしてこの緊張を解こうと必死なのかもしれない。ただ、酷いのは野口をからかって緊張を解こうとするのはどうかとも思ったが。

「あんまいじらんでやってくださいよ先輩。まだ若いんですから」

若いもんをいじくって遊ぶのは、どこの業界も一緒なのかなとぼんやりと考えていれば、そんなことはないかと先日の一件を思い出して頭を振った。
ちゆみは歳が若そうに見えたが、それでも誰にからかわれるわけ

でもなく、淡々と己の仕事をこなしていた。そして、それを当たり前のように受け止めていたではないかと思いだし、健太郎はこんなことを考える。

でも、あの人の独特の纏った空気、あれの所為なのかもしれないな。

何故か冒し難い空気を纏い、そこに在る彼女。ちゆみはそうだ、妙に声をかけにくく、そしてどこか――触れがたいオーラのようなものを放っていた。

ある意味ではああいうのがカリスマってやつなのかもしれないと思いつつ、健太郎は台本の字を目で追っていく。

字を目で追いかけはするものの、一向にそれは頭の中に入ってこない。

「……ヤバいなこれ」

重症かもしれない。

思い出したが最後、ちゆみのことが頭から離れなくなってしまった。

どうしたものかと思ったものの、健太郎に余分な時間は与えられていない。

ペットボトルのキャップを外して中身を一口くちに含むと心を落ち着かそうと努力をするが、落ち着けと心の中で唱えれば唱えるほどに頭の中がぐちゃぐちゃとしてきてしまう。

健太郎がうんうんと唸っていれば、なんだ気分が悪いのかと岡村が話しかけてくるが、大丈夫ですと言うしかない。大丈夫じゃなくても、大丈夫にするしかないのだ。

声優は人気職。意味が二重の意味を持つそれは、一つには所謂子供がなりたい職業として最近上位に挙がっているというところが一

つ。もう一つにあるのは人気がその仕事の量を左右するというそれだ。だからこそ下手なところで今、穴をあけるわけにはいかない。

次の仕事が来なくなったらどうすんだよ、俺！

健太郎がネガティブなことを考えているうちに、車は目的地の地下駐車場へと入場パスを使い、ゲートを潜り奥へと侵入していった。

ペットボトルの中身を一気に煽るように飲み干すと、健太郎は頬をぱしんと叩き、行けますと叫んだ。

「ほんとに大丈夫なんだな？」

「あったりまえです！」

「……まあいいけどさ」

岡村が歯切れ悪く言えば、駐車を滑らかに終えた順平も心配そうな顔をして健太郎の顔を覗きこんできた。

「でもちょっと顔色悪いから、今日お前、早上がりだったろ？これ終わったら病院送ろうか？」

「いえ、平気です。全然いけます」

「……まあ、お前がそういうならいいけどさ。体調管理、しっかりしてくれよ」

「はい」

順平に何かを今されるなんてまっぴらごめんだ。

健太郎は意地でもこの日、今までのトークイベントの中で最高の出来で締めくくってやるとの意気込みで会場入りし、その意気込みのままにイベントを盛り上げ、終了させた。

そのお陰で気分が高揚していたと言うのに、まさか自宅に戻ったら、あんなことになっているとは夢にも思っていなかった。

「嘘だろ……？」

健太郎のマンションは、火災により焼失していた。

＋＋＋

トークイベントで会ったメンバーの中には、別の所属プロダクションの声優も何名か居た。うち一名は出身地が同じこともあり、仕事以外でも良く飲みにいったりと、可也仲良くさせてもらっている人もいる。

だから、とても楽しかったのだ。つい先ほどまでは。

どれくらいの間そうしていたことだろう、健太郎は長いことマンションの玄関前の道路で、他の住民と共に中へ入ることも許されず、呆然と自分の部屋を遠くから眺めていた。

黒々とした煙を巻き上げ、炎は鎮火させようと必死の作業にあたる消防隊の男たちからの放水に、抵抗をし続ける。水が被っても被っても消えない炎を見れば、健太郎は思う。あれは実はＣＧなんじゃないのか、とか、妙に現実感がなくて、喉が嫌に渇いた。

だって俺、さっきまでトークイベントに出てて……

朝から働きづめで、ようやっと今日は早上がりということで夕方に戻ってこれたというのに、どうしてたまに早く帰宅したらこんなことになっているというのだろうか。

冗談にしても何にしても、こんなのは嘘だと思いたかった。

けれどどう健太郎が否定しても、目の前で凄まじい放水が浴びせられるのは、紛れもなくいつも見送って出ていく自分の部屋なのだ。

「なんで……なんで……」

声すら出ない。

炎が未だしぶとく部屋の窓の外を舐めるように這っているのを見れば、唸るより他ない。

――まさしくそれは悪夢、だった。

6　突然の口づけ

どれだけの間そうして上を見上げていただろう、いつの間にか目の前の炎は消え失せ、黒い煤が壁をなぞったような後を残しているのを呆然と眺め続ける健太郎を、不気味なものでも見る様に、周囲の人は避けていった。

けれど健太郎にはそんなもの、目に入らない。彼の目に入るのは、黒くすすけた壁だけだ。

消防隊と警察が今もひっきりなしにマンションの玄関口を出入りしていくが、それすらも健太郎の眼には入らないらしい。

健太郎が喉の渇きに耐えかねてごくりと喉を鳴らすと、それと同時にポケットに入れっぱなしの携帯電話が鳴り響く。のろのろとしながらそれを取れば、聞こえてきた声の主は、別れてからどれくらいたったか――順平の声だった。

『もしもし、林田君？』

「……あ、川治さん」

喉がからからに渇いていたし、ほとんど掠れ声だったはずだ。それを耳にした途端、順平の声色は訝るものに変化する。それも、ほぼ直感だったのだろうが、何かあったのだと気がついたようだ。健太郎に何があったかと有無を言わせぬ口調で訊ねてきた。

「……何？……何って……なんだろ、これ」

だがしかし、健太郎は答えられない。自分でも何が起こっているのか良く分かっていないのだ。

自宅に戻ったら入るな、近づくなで部屋から炎が轟々と燃え盛っ

ているところをただ指をくわえてみていることしか出来ないでいた。
無力感なんてもんじゃない。あれはどこまでも人をつき落とす喪失感だ。
健太郎は無力と共に、それを嫌と言うほど味わっていた。
立っていられるのが不思議なくらいだった、それどころかきちんと説明出来たかも怪しいほどだ。けれどなんとか健太郎は「炎」というワードと、「部屋が……」という言葉を紡ぎ出す事に成功した。他は、ほとんど意味を成さない言葉しか紡げなかったけれど、呆然自失の状態でそれくらい紡ぎだせれば上等な部類、とも言えるだろう。
尋常でない様子、そして炎と部屋という言葉だけでぴんときたらしく、今から直ぐに行くから、兎に角そこでじっとしていろと言うなりぶつりと順平は通話を絶ち切ってしまった。残された健太郎は、またも呆然とただただ自室を――自室だったその部屋を、見上げるだけの作業に戻るのだった。

＋＋＋＋

今更かもしれないが、電話が切れてから数分後、漸く周囲が見えてきたように思う。
すると面白いことだが、自棄になっていたのかもしれないが、何もかも、全てが嫌になっていた。
ぶつりと音を立てて切れてしまった携帯電話を見ながら、ああそうか、面倒だよなと自嘲気味に健太郎は笑う。
何が、といえばそう、健太郎自身が面倒だと思われてぶつりと通話を拒否られたのではないか、などと考えてしまう。
自分でもネガティブ過ぎるとは思ったものの、それでもこの暗い思考から立ち直れない。

人のことになんてこのご時世だ、誰もが構ってなんていられない。それも部屋が炎がとただぽつぽつと語るだけの気持ち悪いやつと話したいと誰が思うか――思うはずもないだろう。

「も……なんなんだよ……」

胸が痛い、抉れるようだ。

故郷は首都圏内ということもあり、別段遠いわけではないが、それでも親元を離れていることもあり、中々に知り合いらしい知り合いというのも健太郎には居なかった。

っていうよりも、頼れる人か？

大学が都内の大学を通っていて、そこから紆余曲折あったのだが、スカウトされて今に至るわけだったりする。なんといえばいいのか、声優としては相当恵まれた部類に属するらしい。

だが、それでも故郷を離れてということもあり、こんな時に頼ってもいいと自分から思えるほどの人物は、まだこの土地には居ないため、不安な日々を過ごしていれば、まさかのまさか、今日のこれである。

本当に冗談でも笑えないレベルだ。

今日はそうだ、早く帰ったら飯作って缶ビールでも飲んで、だらけながら惰眠をむさぼるのもありかなー、なんて思ってて……

間違ってもこんな、仕事終わりにただただ虚脱するような出来事が待ち受けているなんて、そんな予定は健太郎の中には無かった。

喉が何かに押しつぶされるように、痛みを発している。

「……ッ！」

ふざけんなよと叫んだはずの声が、何故か健太郎の口からは――出なかった。

『――良かった！やっと出たな！』
「川治さん……」
『無事だな？今どこにいる？』
「今……今は……自宅の、前で……」

妙なことにこの時の健太郎には、順平の焦った声が、どうしてそんな声を出しているのだろうとしか思えなくて、自分のことを心配しているからこそ焦って電話をしてきていることに、気が付けもしなかった。
一頻り心の中の毒を吐き出してしまえば、また今度は虚脱に戻ってしまう。今の健太郎はまたも抜けがらに逆戻りをしてしまっていた。
そんな健太郎にしっかりとしろと叫びながらも順平が続ける。

『悪いんだけど、そのままそこに居てくれるか？これからタクシーまわすから。その後のことはこっちで何とかするから。……こんなこと言っても今のお前には届かないんだろうけど、気をしっかり持てよ』
「気？気って……」
なんだよ。
『ちょ……あ……』

その後ノイズが飛んだと思ったら、順平の声が急に遠のき、聞こえなくなった。それと同時に人の悲鳴、そして怒号、物の壊れる破壊音が数度続くと、順平の叫び声が聞こえてきた。

『鈴宮ッ！！』

鈴宮？

先日ちゆみの自宅に招かれた際に居たあの千枝かと思いだしたが、その声を最後に、順平の携帯はひと際大きな音を立てて通話が途絶え――それ以降全くといっていいほどに繋がらなくなってしまった。

「……一体何なんだ？」

こんな状況にもかかわらず、野次馬心ではないが、健太郎は順平のその後が気になっていた。

――そんな時のことだ、ぼんやりと炎が散々と蹂躙し尽くした外壁を眺めながらぼうっと考え込んでいれば、目の前に警官や消防隊員がやってきて、健太郎に何がしかを言い始める。

なに、こいつら……

健太郎には彼らが何を言っているのか、全く分からない。

よくあるだろう、専門用語をべらべらと語られても、その専門用語に対する予備知識がなければ、単なる呪文のようにしかそれらを感じられないのと一緒だ。二名三名と彼らはいたけれど、その一人でも健太郎と言葉が通じる相手がいなかった。

何て言ってるんだ？

聞こえない、分からない、気持ち悪い。

ぼんやりとしていていい状況でないことは確かだった。けれどこんな時に追い打つように制服の威圧感たっぷりな人間が何名もやってくるのはどうなのだ。

脳が拒否をしているのか、健太郎は彼らの言葉が頭の中に入ってこないことで焦ってもいた。そして恐ろしくもあった。自分とは未知の生物と相対しているようで、怖くて仕方なかったのかもしれない。

もう、子供じゃないって言うのに。

怪訝そうな顔をした警察官が腕を伸ばす。びくりと健太郎の肩が揺れた。一体何をされるのか――そう考えたのか、怯えた様子に慌てて駆けつけてくれたのは、まさかのまさか、ちゆみだった。

「済みません、遅れました！！」

警察官は矢張り怪訝そうな顔をしているが、ちゆみと何かを話し、承諾したようだ。こくりと首肯を返すと、いってよしとばかりにちゆみに手を振ってくる。その愛想の良さになんだか健太郎は腹が立った。それは警察官の愛想の良さの理由が分かったからだ。

何故か一発でちゆみだと気がついたものの、言われなければ相手がちゆみとは思えないほどに、先日あった彼女とは風体が異なっていた。

有り体にいってしまえば魔法をかけられたように、今日の彼女は美しかった。

そして、何故かその彼女に、健太郎はマンションの玄関まで連れていかれ中へと入っていくと、道路からは影になる場所で壁に押し付けられて、口づけられていた。

『……な、なんっ、なにしてんだよこの人？！』

7　荒らされた、跡

セキュリティー面ではしっかりしているマンションを選んだつもりなのだが、そのマンションの玄関ホールにも、死角というものは存在する。

ちゆみは高いヒールのある靴を鳴らし、その奥へとずかずかと入りこむと、周囲を一瞥し、監視カメラからの死角と、そして道路からも他からも、見えない位置を確認し、そこに未だに意識ここにあらずの健太郎を押し込んだ。

「気つけみたいなもんだから、カウントしないでいいし」

言うだけ言ってしまえば、どうせ聞こえていないだろうけれどと思いつつ、ちゆみは健太郎の唇を奪う。

すると口づけて十秒もしないで目の前の男に突き飛ばされた。それくらいで意識が戻れば上等。

流石によろけはしたものの、これくらいで倒れるほどちゆみは軟ではない。直ぐに体勢を立て直すと、正気に戻ったかと訊ねる。すると顔を真っ赤にした健太郎は、まるで生娘の如く恥じらいながら「何がですかあああ！？」と叫んだ。

「……君は、なんていうか、可愛いんだね？」

ちゆみは良く分からないけれど、妙に可愛い反応をする男だとの印象を抱いた。

さて、正気に戻ったのだ、さあ行くぞと、健太郎の腕を引いて彼女はさっさと歩きだす。

「ちょ、ちょっと、何なんですか！あの！」

「君、これから少しの間でいいから私に話しをあわせなさい。いいね？」
「ええ！？」

なんだか先日有った時とは印象が全く違うちゆみは、本日の服装通りにキャリアウーマン風なのか、てきぱきと物事を決めるだけ決めて健太郎に押し付けてくる。そんな相手の都合なんてお構いなしという姿についていけず、健太郎は益々混乱が極まってきた。
ちゆみは道路に戻るなり、警察官と消防隊員の前で腰を九十度にまで折り曲げると、申し訳ないと平謝りを始める。ことの成行きを見守りつつ、適当に話しをあわせねばと思っていた健太郎も、慌てて頭を下げた。

「もう正気に戻ったようですので……大変申し訳ありませんでした」
「いえいえ。あんなことがあったんじゃ、そりゃね」
「よくあることですから、お気になさらず」

皆愛想よく受け答えしてくるのが何だか嫌で、健太郎は下げた頭のままに「うげえ」とばかりに顔をしかめた。
頭を上げて困ったように眉を八の字にしたちゆみは、健太郎を「うちの所属の声優」と呼び、マネージャーのように振舞い始めたかと思うと、詳しい話しを警察官と消防隊員に話させ始める。何があったのかも分からないままでは困る――まあ確かに所属声優がいきなりのこれじゃあ困るだろうが、いつの間にあんたは俺のマネージャー様になったんだい？と、思わず「え？」と、健太郎が大きな声を上げてしまうと、さりげなくちゆみの踵が健太郎のつま先に下りてきて、ざくり。

「……ッッ！！」

太ももをぐいと摘んで捻り、なんとかその痛みでたえたものの、行き成りのこれには流石に酷いと言いたくなった。

「――ええ、マネージャーさんの言う通り、確かに不審な点がありましてね……ですから先ほど事情を窺おうと、久保さんに話しをと思ったんです」

因みにこの久保というのは健太郎の本名である。

久保健太郎が本名で、芸名は林田健太郎だ。正直本名でよくはないか？と健太郎自身思うほどに、ほぼ変わらないその名前に首を傾げることが多々ある。

健太郎は警察官の話しになるほどと内心頷いた。

先ほどのはそういうことで近づいてきたのかと思いはしたものの、何故話しの内容が頭に入らなかったのだろうかと首を傾げる。

これは後で知ったことだったが、誰の目も誰の声もほとんど耳に入らずに、ちゆみの姿や声だけが暫くの間聞こえるだけ、だったらしい。そんな健太郎を正気づかせるためにちゆみはああしたのかと理解すると、わけも分からず何故壁に押し付けられているのかと、混乱したままに目の前の人物が誰か分からず突き飛ばしたことに、健太郎は少なくは無い罪悪感を今後、抱えることになるのだった。

「――荒らされた形跡があるってことですか？」

慎重にそう訊ねるちゆみに、警察官は周囲の目があるので、兎に角一度見ていただけませんかと言うだけ言ってついてくるようにと促した。

ちゆみは健太郎の腕を引き、警察官の先導に従い続く。健太郎はそんなちゆみに引きずられるままについていくしかなかった。

目の前に広がるのは黒い床に壁に窓、残っているものを探すほうが難しいほどのそれは、この部屋の住人であった健太郎ですら足を踏み入れることを躊躇うほどだ。
臭いもなんとも凄まじい。今もところどころぶすぶすと黒煙が立ち上っているところが発見出来るという有様だ。これは酷いなんてもんじゃない。悲しくて切なくて、健太郎はなんだか名もつけられぬ複雑な感情を抱き、涙が滲んできた。
けれどこちらは違った。他人事だからなのかもしれないが、

「酷いね」

あっさりとそれだけ言うとちゆみは何の躊躇いもなく、ずんずんと中に土足のまま足を踏み入れ入っていく。
流石に土足！とは言えず、慌てて健太郎も足を踏み入れたが、酷い臭いに鼻が瞬時にやられそうになった。

「なんすかこれ」
「ビニルとか落ちてた毛髪とか、カーペットもそうだよね。何でも燃えたんだから仕方ないよ。家が燃えるとこんなもん。諦めなさい。ところで消防士さんの話しは聞いた？」
「え……いえ」

首を振りつつ健太郎が否定すれば、ちゆみは警察官に促した。すっかりと警察官も消防隊員も、ちゆみのペースに巻き込まれてしまっているのがなんだか妙だ。

「その窓なんですがね？」

警察官が指し示した窓を見れば、そこは隣のマンションに近い側の窓で、寝室の大きな窓だった。ただ、隣のマンションが近いこと

もあり、健太郎はそこをあけたことはない。あければ隣のマンションから丸見えだ。それは遠慮したかった。

そこが何かと首を傾げる健太郎に、警察官も消防隊員も顔を見合わせてしまう。

「……この足元に転がっている石だと思いますが、これが投げ込まれて……割れていたんです」

8　誰かが火を放った可能性

見れば確かに黒く焦げた床の上には大きな石が置いてある。これも黒煙ですっかり煤けてしまっているが、それにしてもなんでこんな石があるのか。

そもそも割れていたとはどういうことだろうかと怪訝そうな顔をすれば、消防隊員は続ける。

「熱せられてそれにより窓が割れるのはよくあることなんですがね？真っ先に突入したのに、まだそう燃え広がっていない寝室の窓が割れていて、傍にはこんなキャベツくらいある石がある。こりゃあどう考えても先に割られてしまったと考えるのが筋ってもんです」

そこで警察官が話しを引き取り続けていく。

「だとすれば放火の線も考えなければならないわけです。……そして、こういうマンションの出火でよくあるものが、階下が出火、そして上の階の部屋が全焼ということもあります。ですがここは……どう考えても貴方の部屋だけが燃えている」

誰かが燃やしたと案に言われ、健太郎は段々と血の気が引いてきて――そして今度は怒りが頭を支配し出す。

どういうことなんだよ、それ！！

かっとなった怒りをそのまま振りまわそうと健太郎が口を開きかければ、すかさずちゆみがあげようとしたその手をパンと叩き落としてきた。

「馬鹿。怒りよりも他の感情を抱きなさい。――君の部屋に侵入者が居たってことかもしれないんだよ。玄関から入るには、このマンションはセキュリティ高いから、窓から入ったかもしれない。だとすると……放火目的だったわけじゃなくて、本当は君のことをここで待っていた可能性だってあるんだ。それも最近のテレビとかでもあるでしょ？もしかしたらそれは包丁持った犯人だったら？都市伝説じゃないけど、ベッドの下に潜んでいたら？そんな人が居たとしたらどうするの？怒るよりも先に、怯えなさい、考えなさい――何があったのかを」

危機意識が足りない、頭が足りないと散々とこきおろされて凹ませられれば、流石に健太郎も反省した。警察官はそれを聞いて、流石にそこまではどうかはわかりませんが、確かにマネージャーさんの言うことも有り得ないとは言い切れませんから、怒るよりそうですね、怖がって用心するようになってくれたほうがいいかもしれませんと、柔らかな表現でちゆみの言葉を繋ぐように言う。

それを聞けば健太郎の頭に上っていた血がすうっと引いていくのが分かった。

石が投げ込まれて、窓から入ってきた。

ベッドの脇にある窓は今、割られてしまい外が見える状態だが、その上にビニルシートが被っていて外は見えない。実際はその奥に見えるのは、外の景色で隣のマンションの非常階段だったはずだ。犯人はそこから大きな石を投げつけ、本当に侵入してきたのだろうか。

「……仮に二人の言う通りにそこから誰かが入ってきたとしても、無謀すぎやしませんか？だって隣のマンションのそこって……確か非常階段ですよ？その手すりから二メートルくらいの距離だ。無茶ですよ。落ちたらここは八階です。死ぬんですよ。地上から何メー

トルあるんです？そんな馬鹿なこと……誰がするっていうんですか」

有り得ないとばかりに健太郎が言えば、ちゆみはふいに思いついたようにこんなことを言ってきた。

「ストーカー、とか」

「……え？」

「だから、君に対して好意ないし、悪意を抱いた人間……それも、凄い執着心を持った人がいたらどうかなって思ったんだ」

同じ事務所所属の彼女ですらそうなっているのだから、君がそういう誰かが居ないとは言い難いと言われれば健太郎は眉を寄せてどういうことかと訊ねてきた。

だがそれは警察官も同じで――

「マネージャーさん、それは一体どういうことでしょう？」

「……実は今うちの所属の女性声優に好意で最初は近づいてきたはずのファンが、いつの間にか行き過ぎた好意になってしまって……メールはしょっちゅう。ファンレターも山のよう。それはいいんですよ、ファンですからね。その声優も嬉しがっていたんです。最初のうちは。――ですが……いつからかな？返信が返ってこない。メールの返信は三時間以内に返ってこないのはおかしいなどとファンが言いだし始めたらしく、ちょっとおかしいぞと事務所でも話題になってはいたんですよ」

「三時間以内って……」

一般人でも不可能な部類に入るだろう。

「そうよね。だって仕事中だってファンも知ってるのよ？なのに返信が無いのはおかしい――っていうか三時間以内に返ってこないの

はおかしいってどう考えても破たんしてる。だってファンの子のメール、読ませて貰ったけど支離滅裂なの。

『仕事中なんだよね』
『応援してるよ』
『なんで返信くれないの』
『ああもう僕のこと嫌いになったんですか』
『仕事大変だね、頑張ってね』
『返信くれないと死ぬ』

これって脅迫だよ。何それって感じ。っていうか、放っておいて本当に死なれても困るしね。そしてこの頃になると声優さんも怯えちゃうしで。ちょっとそこから騒動になって、警察にも出動願ったんですよ。相談って形から始まって、相手方に警告して貰ってって」

「まあ、そうっすよね」

それはストーカーの対処の模範例みたいなものだろう。
まずは自分である程度対処できるレベルまではするけれど、対処出来ないとなったら警察に助けを求める。最初は相談と言う形になるが、その後警察に「どうしたい？」と聞かれ、「警告」をするかしないかと聞かれる。
この警告をされると相手は従わない場合は次は速攻捕まえるからね、ということになるのだが、大体のストーカーはその時に半分に態度が割れるらしい。

「まあね、最初相手は認めなかったよ」

ストーカーをしていたと認める相手、認めない相手。
けれどメール発信が大量に残されていたのと、ファンレターとい

う物的証拠も残っていたため、認めざるを得なくなった。

「だってさ、認められないわけないのよね。ファンレターん中身ヤバいのよ。爪切ったのが入ってるの。血もついてるやつ。怖いでしょ？」

あんたが送ってきたものをＤＮＡ鑑定でもするか？って面倒だからしないけど、そうやって面と向かって言ったら大人しくなったよとけろりと言うのは臨場感があり過ぎだ。

ちゆみが淡々と語るその言葉に、警察官も消防隊員も健太郎も、全員が男だというのに縮こまって青くなり、こくこくと頷いている。一人平然としているのはちゆみだけだ。肝っ玉が違うというのか、妙に淡々としていて精神的に強い人なんだろうと感じる。

「他にも結構入ってたんだけど、ここでは言えないようなレベルのものだからそこはまあ各々考えてください――で、相手はどう考えてもモラルハラスメントの加害者で、精神的にいっちゃってるから話し合いの余地ないのよね。むしろ、話しが出来ない人なんだ。精神科医もモラルハラスメント加害者は矯正出来ない精神構造していて、他者を傷つけずにはいられない人間ってことで、人と思わず接してくださいって言ってたけど、あれほんとそうね。事務所側も誠心誠意尽くして話しをさせて貰ったけど、最初言ってたことと違うのよね。相手。ついでに事務所側にはまともな対応するからたちが悪い。大体のモラルハラスメント加害者は本当に猫被るの上手いんだけど、例にもれずよ。事務所側に対しては普通にまともそうなんだけど、ためしに声優一人にしてカメラ回して撮影したんだけど、途端に罵声、お前が悪いとか叫んじゃうわけ。かと思うと今度は猫なで声で

『僕だってこんなことしたくない』

『好きだよ』
『愛してるよ』

いや～、心理鑑定ものとか精神分析官とか、そう言う人の著書読んでるけどさ、あれほど典型的なモラルハラスメントでストーカーは初めて見たね。本当、最低だったよ～」

これを笑いもせずに淡々と――実に淡々と語るちゆみはどう考えてもその場にいたとしか思えず、恐る恐る健太郎は訊ねた。

「やっぱ、それって、沢地さんもその場に？」

沢地というのはちゆみの名前だ。

沢地ちゆみ。本名かどうかは知らないものの、これで本を書いている。

ちゆみにそう訊ねると当たり前と言われがっくりと来た。

あんた本当なにもんなんだよ。

事務所の内部事情にどこまで突っ込んでるんだ！と思いつつも流石に今は言えず、不承不承ながらも口を噤めば、警察官が唸りだす。

「……やっぱり声優さんでもそういうのがいるんですね」

「芸能人なので、そこはどうしてもそういうのが多いかなと思いますよ」

いい人もいれば悪い人もいる、世界には人が何十億と居るのだ。多く関わる仕事につけば、それだけ多くの人に接するのだからいい人も悪い人も、関わる人が増えるにつれ、どうしたって相対的に見て増えるに決まっている。

だからより人の目にとまる仕事をするのだから、仕方の無いこと、

そう思うより他ないのかもしれない。

けど……

だからって本当に放火だとしたらやりきれないではないか。

健太郎は拳を握りしめると、ぐっと唇を噛んだ。それを横目でちらとちゆみが見て、さりげなく目を逸らす。今は、かける言葉が見つからなかった。

9　必要な手続きをしよう

警察官と消防隊員の方に、火災で家が焼失したことの証明書を手早く作成して貰い、ちゆみは強引に歩きだす。

「あのっ！ちょ、待って下さいよ！」

「君のほうが持ち前のコンパスが大きいんだから、私より早く歩けるでしょ？遅い」

「そうじゃなく！」

引っ張られているから歩きにくいんだよ！とは言えず、おたおたとついていくしかない。

健太郎がえっちらおっちら追いつけば、ちゆみは一度後にした健太郎の部屋に逆戻りしてきたようだった。

まだそこは警察官がおり――といっても、もう直ぐ帰るところのようで、戻り支度を初めていたが――ちゆみは慣れた様子で「お疲れ様です。ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありません。本当に有難う御座いました」と言い、健太郎の部屋だった場所に潜りこむと、健太郎をここでようやく振りかえった。

「さ、無事なものを適当に拾い集めようか」

「……え、でも」

ここってまだ現場ってやつなんじゃないのかと訝る健太郎に、ちゆみはいった。

「さっき警察で火災証明書いて貰ってた時に聞いたけど、無事なやつは火災で焼け出されたわけだからって、持っていって少しでも今

後に役立ててていいよって言ってたから。大丈夫」
「ああ、そうなん……すか」

今後に役立ててと言われても、どうすればいいのやらである。
手持ちの現金は五万くらいだったか。そこに小銭が少々。そしてカードの類はクレジットカードはあるとしても、確か銀行のカードはここに朝置いていったような気がする――それを聞けばちゆみは大至急！と叫ぶなり、自分も使えそうなものをと黒い床の上を小走りで走り出した。

「え、どうかしたんですか？」
「馬鹿！誰かが侵入したかもしれない部屋！そこに置き去りの銀行のカード！なんで置いてったんだか知らないけど……」
「いや、最近無駄遣い多いんで。ちょっと持ってるの不安だったんです」
「馬鹿じゃないの！？無駄遣いするやつはするの！しないやつはしない！銀行のカード持ってないのにクレジットカード持ってるってどういうことだ！」
「だ、だって。なんかあったら困るじゃないすか！」
「そっち持ってたら一緒！！兎に角早く荷物纏める！急ぎなさい！」
「わ、分かりました！」

半ば自棄になりそう叫んだ健太郎に、ちゆみも駆けずりまわる。
そして見つかったのは火を免れた鍋が一つ、玄関口まではそうは火が回らなかったようで、靴が二足。たったのそれだけだった。
「洋服は全滅。日常の雑貨類全滅。了解したわ。さ、行くわよ」
「……って、ほんと、何？えええ？」

もうわけわからん！！

健太郎はちゆみに引きずられるままに、その後銀行へと有無を言わさず連れていかれた。

＋＋＋

銀行に向かう前に真っ先に向かったのは印鑑を作る場所だ。

「なんでここなんですか？」

「君は家が燃えてしまっただけではなくて、全てが焼け出されているという事実は覚えているの？」

「……そりゃまあ」

覚えていなかったらどんな鳥頭だって話だ。

ちゆみが家の中にあったものが全て無いんだから当たり前に必要でしょうとだけいうと、面倒な説明は省くつもりか、何も言わずに店主と何やら話し出す。

「シャチハタ、三文判、実印――実印なんですけど、二つの字体で一個ずつ作っていただけますか？」

それを受けて店主はでは四つおつくりすることになりますねといい、字体と字面をさっさと決めてその店を後にする。一週間で全て出来上がるらしいが、何に使うのか……この時の健太郎には良く分かっていなかった。

次にようやく銀行にきたのだが、まず真っ先にカードや通帳からの引き落としを止めて貰い、残額の確認をしてもらった。そして印鑑も焼失してしまったため、被災証明を見せて納得して貰うことになるのだが、この話しが実に面倒だった。

「……ああ、だから印鑑を先に作りにいったんですね」

シャチハタは色んな物に使うとして、三文判も同じくそうだ。実印だが、片方が銀行用にでもするつもりなのか、と思いなるほどと健太郎は納得した様子で頷いた。

実印と銀行印を同じにしている人もいるらしいが、これはあまり褒められたことではないからなと思う。一つ盗まれると後が大変なのだ。

ちゆみの手にあるのは印鑑を作って貰っているという店主のメモだ。これは銀行には必要はなかったのかもしれないが、ここまで手続きをしている最中だからというのにあるとないとでは説得力はまた違ったものになるのだろうか。流れで一応の証明程度か見せるそれに、銀行員も納得の顔を浮かべていた。

「申し訳ないんですが実印から何から何まで焼失してしまい、銀行のほうも何も出来ません。兎に角カードが盗まれてしまっている可能性もありますので、一旦全て口座を停止していただく形でお願いします」

「畏まりました。では久保様の口座のほうは……」

実に手際がいいことでと思いつつ、健太郎はもうただ座っているだけの、単なる置物と化していた。これではどっちがどっちか分からない。必死さ加減がまるで他人事のような健太郎とちゆみでは、雲泥の差があった。

なんか、なんでこんなに頑張ってくれるんだろうって思っちゃいけないんだろうけど……

健太郎には何故こうまでちゆみが自分のことに必死になってくれ

るのか、分からなかった。
銀行がこれで終わると次に向かったのが保険会社である。
「保険入ってるよね？火災保険」
「……マンション入る時に、まあ、入れられる形でしたけど」
健太郎が入っていたようなと思い出しながら口に出せば、呆れたように言われてしまう。
「……君は独り暮らしに向いていないな」
放っておいてください……とは流石に助けて貰っている身では言い過ぎだろうか。健太郎はなんともみじめな思いを味わっていた。
ちゆみが保険の会社名をなんとか聞きだすと、そこにも火災証明を持ったまま向かった。
なんでも、これがないと話しにならないらしい。
「火災証明がないと、結局さ、保険の証書なんて誰もがもっちゃいないでしょ？持ちあるいて生活なんて出来るわけないし、普通の人は持ってないで生活してる。だからこそこれがないと話しにならない。保険会社は写しを持ってるわけだから、後は本人の証明として火災証明さえあれば、なんとか保険金が受け取れるってわけね」
警察と消防が発行してくれる火災証明はこの時の命綱なんだから、ちゃんと次からは自分で受け取ること！と強く言われてしまえば、ちゆみの勢いに飲まれたようにこくりと健太郎は頷き返す。もう本当に今日の自分はお荷物以外の何物でもないではないか。
「なるほど……勉強になります」
「そうだよ、勉強しておいてー。後で困るの君だからね」

「う、……はい」

アスファルトを二人で早歩きで駆けるように歩くと、程なくして保険会社についた。話し合いだ。

にしても目まぐるしい勢いでこなしていっているが、どうして被害者のほうばかりこんなにも大変なのだろうか。健太郎がそんなことをぼやくように嘆いていれば、ちゆみはからからと笑って言った。

「交通事故もそうだよ、被害者だけが辛いし大変な手続き塗れになる。加害者なんて楽なものよ？轢いてしまえば後は自分の加入している保険会社の弁護士――まあ弁護士付きって保険に加入が前提だけどね。もしくは保険担当者に丸投げしちゃえばいいだけだもん。被害者は通院に相手方との話しあいに、相手保険会社が支払い拒否した時は裁判だなんだでそうね……長ければ数年かかって一つの交通事故案件が終わるようになる、かな？」

「そんなにかかるもんなんですか？」

「そりゃかかるよ。交通事故なんてあったら最後、身体ズダボロだよ？運よく身体に見た目で分かる様な後遺症がなくたって、何年もかかって首が痛い、腰が痛いと出てくるもんだし。一生ものになるのが大抵だから。そしたらちょっとやそっとで簡単に引けないでしょ？」

だからこそ被害者は必死になって相手方と交渉することになるのだと言うちゆみに、矢張りそんな不測の事態に陥ってみたことが無いからか、どこか実感がわかず、分からない健太郎はどこかおかしいのだろうか。

「ま、それが普通の反応よね。なってみなくちゃこればかりは分からないもんだし」

それだけ言うと、ちゆみは「買いだし」に行こうと健太郎の手を取り微笑った。

「え……？」

その微笑に見惚れてしまったのが運のつきだ。強引に手を引かれ、引っこ抜かれる勢いで健太郎は移動を促されるのだ。

なんて力持ちなのと、こんなところできゅんときてどうする俺！？——健太郎は男らし過ぎてちゆみにうっかりときめいてしまったが、なんだかおかしい。

言うなれば——逆の立場であったならば、ということか。

おかしい、おかしいでしょうこれ！？

「今日からの必要なもの、何もないでしょ？さ、行くよ」

「いや、俺ホテル探さないといけないんで！寝るとこのほうが先かしらー……って！もう、そのっ……あのおおお！」

ちゆみは強引に——可也強引に健太郎をタクシーに押し込むと、そのままちゆみ宅の最寄りデパートまで向かった。

「今日は行くわよ大人買い！さあ、じゃんじゃん買うぞ！」

「いや、ですから沢地さん！？」

タクシーは健太郎の悲鳴を残し、無情にも走り去っていくのであった。

10　買いだしって、なに？

ちゆみは無表情で実に淡々としている。これが単なる日常雑貨を購入しているシーンであるならばそれでもかまわないのだが、問題はちゆみが手に取っているのは健太郎のものになるであろう、肌着だから困るというもの。

「あああああ、あの！」

「やっぱりパンツはよくわかんないな。グンゼのブリーフ派の子もいるだろうし？ボクサーパンツの人もいるよね？トランクスの解放感が堪らないって言う子もいるしさ？……うーん、やっぱり自分で選んでくんない？」

「え、選びますけど！っていうか、沢地さん、俺の下着なんてそんな……いいですから！」

ちゆみの手から男ものの肌着やら下着やらを取りあげると、真っ赤になって健太郎は叫ぶ。

そんな健太郎の慌てふためく様を見て、ちゆみは何を思ったのかと言うと――呆れたように言ったものだ。

「大声とか止めて？ここ、一応デパートだから。って言うか、君やっぱり目立つんだよね。身長もそうだけど、一応は芸能人だからかな。一緒に居る所見られると君、困るだろうし……やっぱり変装するか」

「って……なんすかそれ」

「だってさ、そのままだと帰れないじゃないか」

「帰るって」

どこにだよ。
俺は家を失くしたんですけど、とは流石に自分で自分の心を抉ることになるためか、言葉に詰まって言いだせなかった健太郎に、ちゆみは待ったなしで続ける。

「せめて先に帽子とか買おうか。一番いいのはカツラだけど、いやでしょ？帽子とサングラスか眼鏡でちょっとでいいから顔変えて、それから買い物しよう」
「……もういいです。好きにしてください」

もう説明を求めても説明して貰えることもないのは分かっていた。だからもう諦めと共に健太郎は、全てを丸投げ宜しく、ちゆみに好きにさせることにした。
するとちゆみは心得たとばかりに微笑を浮かべると、じゃあこっちと奥へと健太郎を誘うのだった。

帽子売り場に来たと同時にタイトスカートから覗く足をじっと眺めやると、ほっそりと締まった足首が綺麗で見惚れてしまう。

この人良く見たらパーフェクトボディじゃないか？

顔も先日とは違い、面に髪がかかっていないためか、整った顔立ちがすっと顎のシャープさまで全面に押し出していて、その輪郭の美しさにほうっと吐息が漏れてしまう。
化粧もうっすらと施されて、ただでさえ整って見えていた顔立ちが、ぐっと引きしまって今ではストイックな中にある、大人の色気のようなものが漂って見える。
髪を美容室ででも整えてきたのか、綺麗に梳いて後ろに流し、これまた女としての魅力をぐっとそれだけで引きあげただけでなく、その髪型に合わせたようなかっちりとした印象を与えるスーツが身

体のラインを見せていて、実にセクシーだ。それも、下品な色気ではなくて、健康的な色気を見ているものに与える類のもので、健太郎はなんとか気持ちが落ち着いてきたところで、今度は妙に目の前にある華奢な身体にどきどきしっぱなしだった。

本人は煽っているつもりは皆無だろうし、そもそも健太郎を所謂男とは見ていないのだろう。でなければこんなにも気軽にぽんぽんと言うこともないだろうし、それどころか下着を手にとって無表情にこれは違う気がするけど、などと無遠慮に言ってくるだろうか。

っていうか、弟扱いか？

だよなあと溜息を吐きだすと、目の前で形のいいヒップをタイトスカートに包んでいるちゆみがくるりと振りかえり、健太郎の頭に腕を伸ばしてきた。

「……届かない」

何が、と言えば頭に手が届かないのだが。

身長差があるからかとちゆみは思ったものの、なんだかむっとした。身長が中途半端なことをちゆみは気にしていたからだ。

ちゆみの身長は女にしては大きく、ヒールを履いてしまうと百七十三。健太郎の身長は百八十後半か、下手をすれば百九十台なのではないだろうか。後二センチくらいあればもうちょっと高いところのものが取れるのに！と日々思っているためか、ちゆみとしては憎らしいその背に、なんだか行き成り目の前の長い脚を蹴り飛ばしたくなった。

「む～……」

自分の欲しい身長がそこにあるのがなんだか軽く憎らしくて、目

の前にある襟ぐりを掴み、引き寄せた。

「ちょっ！」

途端近くなるのは互いの距離だ。目の前にきた健太郎の頭に、よいしょとちゆみは選んだばかりのスポーツキャップを乗せてみる。

ちゆみからすれば顔の前に健太郎の頭がある程度だが、健太郎からすれば堪ったものではない。目の前には突然現れた双丘だ。その柔らかいだろうそれに、ぶつからずに済んだことは幸か不幸か――絶対に不幸だと健太郎は思った。

相当なボリュームがあるように見えるそれは、健太郎の見たところ、Fカップは超えていると推察された。これに埋もれるようにしたならば、さぞ――と不埒なことを考えていれば、ちゆみからぺしりと叩かれた。

「帽子それでいいって聞いてるんだけど？もしもーし？」

「い……ちょっと待ってください」

確実に意識が丸い物に飛んでいたなと思いつつ、首を巡らせ、なんとか鏡を見つけ出すとそこに自分の顔を映し出し、じっくりと眺めやる。

「もうちょっと顔隠れる方がいいんじゃないですかね？」

顔を隠したいという理由ならば、そうするべきだろう。これではツバが狭く、横からの顔が丸わかりだ。正面からであれば、とは思うものの、ほとんど顔を隠す意味は無いように思える。

そう健太郎が告げれば、ちゆみが「でもこれが一番君に似合うんだけどな……」と少々残念そうにぽつりと零した。

そんなちゆみの両手には、山と帽子があり、それら全てを今まで

健太郎の頭に被せては試してみたことを思うと、健太郎の胸は得も言われぬ幸福感に包まれる。

何この可愛い発言。

っつかなんなのこの人。

そんなことを言われたら、頭から外しにくくなるというものではないか。

結局健太郎はその後、ちゆみの選んだ帽子を目深にかぶり、これでいいとそっけなく答えるだけで次を被ろうとはしなかった。

なんでデートみたいになっちゃってるんだろうなあ、彼氏持ちと。そんなことを考えながら健太郎はちゆみに続いて会計に並ぶのだった。

「え……あああ、あの！それくらい俺買えますから！っていうかクレカあるし！」

「んーん。いいって。今は現金を大切にしておきなさい。カードの類がどうなっているか分からない以上、今は無駄遣いするべきじゃないよ？」

銀行のカードが盗まれていた場合を考えると、ここでクレジットカードなど、遠慮なしにバンバン使うのは確かに得策とは言えない。だが、そうは言っても気が引けるというもの。

先日出会ったばかりで、それも今日は何故か行き成りあんなところに現れて話しを纏めてくれたのだ。これ以上迷惑をかけるのはあまりにもと健太郎が止めるのも無理はない。

けれどちゆみは言った。

「だから、気にしないで。困った時はお互い様だし、後で何かで返してくれればいいよ」
「で、でも……」
「あーもー、はいはい！この話し終わり！さ、帽子買ったし次は眼鏡ー！眼鏡屋さんに行くよ？」

あ、私スポーツタイプの格好いいのがいいなあなんて健太郎の顔を見ながら言うちゆみは、更に憎い一言を言ってくれた。

「君には絶対スポーツタイプの方が似合うよね。あ、でも知的眼鏡君でも格好良いと思う。ううん、難しいな。……ね、君はどっちのほうが好み？」

あんたは一体俺をどうしたいんですか！
こうして健太郎はわけのわからぬまま、ちゆみの「買いだし」に振り回されっぱなしになるのだった。
どんどんと彼女に惹かれていく自分を自覚しながら……

11　許してあげて

「君の今の服の系統でいいんでしょ？」

そう言うなりちゆみは健太郎の今身につけている衣服と似たような系統の服を二着。それと多少フォーマルとまでは言わないが、それでも見られる程度の服を一着。靴は一応持ってきたものは履けるとしても焼け出されたためか、臭いが酷いので靴の修理屋に出して、別に一足購入した。

肌着、下着、ベルト、そこまで購入したところで今度はちゆみが何か思い出したように言う。

「寝る時？じゃないか。お風呂から上がって着るものなんだけど……バスローブ派？それともパジャマ派？それとも裸族？下着だけってのもあるかなあ？」

「え……それは」

お泊りに来た彼女に着せる服だろうか、などと何故か思ってしまった健太郎は、目の前のこざっぱりとして綺麗になったちゆみに脳内で着せ替えをして考える。

「……バスローブかな」

脱がしやすい上にバスローブの白が一番綺麗に彼女を見せてくれる。そう考えた上だったのだが、ちゆみはじゃあ次はバスローブ！と元気よく言うと、またも健太郎の手を引いて歩きだす。

よくよく考えてみれば手を繋いで歩いているわけで、なんだかこの行為だけでも赤面してしまうのは何故なのだろうか。

中学生じゃねえんだぞって。

どんだけガキなの俺はと健太郎は内心で自分自身に言いたくなった。

格好悪いにもほどがある。これでも結構俺はモテるほうなんだぜ？なんて言いたい。

なのに他のどんな女を前にするよりも、ちゆみの前に居る時のほうが馬鹿みたいに浮かれていて、ガキみたいに青臭くて、嫌になる。けれどそんな自分が嫌いじゃないのが尚更健太郎は嫌だった。

こんな自分は知らない。

しかも彼氏持ち、なのに俺はなんなんだよ……

望みがないのに俺は何をしているんだろうと浮かれる心に釘をさすようにするものの、一向に浮かれた心は落ちつこうとはしないのだ。

あーあ、神様は俺をどうしたいんだろうね？

本当に、神ってやつがいるのなら、聞いてみたかった。

どこに行くのかと思いきや、ちゆみは先ほどの発言通り、日常雑貨の販売している店に入るなり風呂のコーナーへと向かい、目当てのバスローブを手に取り健太郎に即座に合わせてきた。

けれど当たり前なのだが、一般的とは言い難いその背丈である。健太郎の丈とは矢張り合わないようだ。

これではミニスカートである。膝上あたりまでしか丈がなく、なんとも見ていて見栄えが悪い。

それを見てちゆみは唸るように言ったものだ。

「そうよね、丈足りないよね」
「……って、俺が着るんですか？！」
「そりゃ当り前……って、誰が着ると思ったの？」

首を傾げるちゆみに、そりゃ貴女がですがとも言えず、健太郎はいやあと苦笑いを浮かべた。くそう、夢が儚く砕け散ってしまった。

「やっぱバスローブじゃなくて、普通に部屋着とかのほうが寝心地はいいかな？」
「え？もしかして、俺が寝る時のかっこ聞いたんですか？」
「そうだよ？私は下着だけで寝るけど、流石にベッドも枕も変わるのに、他人様に同じこと強要していいわけないよねーって。更に寝にくくなるじゃない？君の仕事に差し支えて欲しくないし、やっぱりね……考えちゃうじゃないか」

なんとも細かな気遣いである、とは思ったものの、健太郎はちょいとばかり聞き逃せない言葉を聞いたような気がした。

「下着、だけで寝るんですか？」
「うん。ほんとは全部脱ぎたいけどね。全部脱いで寝ると楽だって聞いたんだけど、でもねえ……」

その後は言葉を濁されてしまったため聞けずじまいだったが、それ以上を突っ込んでいいものか分からず、健太郎は流石に聞くのを止めた。
適当なパジャマを一組セットで購入し、シーツや歯ブラシを購入、更には枕専門店にまで出向き、健太郎にあわせた枕まで新調してくれる始末だ。どうしてここまでしてくれるのか、健太郎には分からなかった。

優しさにしても行き過ぎに感じるほどで、むしろここまでくると戸惑いよりも明らかにおかしいとの言葉しか浮かんでこない。

「ってか、その……川治さん、どうかしたんですか？」

ちゆみが遅れて申し訳ありません、ときたことをふと思い出し訊ねてみれば、ちゆみは無言だ。

そして順平にもあれから繋がらないのが不自然過ぎると電話を入れてみたが、矢張り繋がらない。通話中なのか、ずっと通話中を示す音だけが鳴り響く。

変なんてもんじゃない、おかしすぎるってもんじゃないか。

「あの、沢地さん……川治さんに一体、何があったんですか？」

恐る恐る健太郎が訊ねてみると、ちゆみは存外簡単に口を割った。

「順平のことでいいのよね？えっとね、順平は今病院と警察のどっちか」

「……はあ！？」

「鈴宮千枝ちゃん、君のところの後輩ちゃんね。この子が襲われて、それを庇った順平も……ってこと。だからあの子には電話繋がらないよ。私の携帯に鈴宮ちゃんからかかってきたので私も知ったくらいだし。携帯ぶっ壊されたみたいだから、もしもかけたなら無駄だよ。壊れてるから繋がりっこない」

「そっ、いいんですか！？」

「何が？」

「だから、見舞いとか！」

付き合っていると思ったからこそ声を張り上げたわけだが、ちゆみは入院はしていないと首を振って答える。そう言う問題でもない

のだが。

「診断書とっとけば後のち犯人と交渉するのにいい材料になるから取るために病院にいってきなさいって進めたのは私。だから別に酷い怪我じゃないんだよ。二人とも、もう自宅に戻ってるってメール入ったから安心して。それと、流石にあの直後じゃいけなかったらしくて、私がきたんだけどね、いけなくてごめんって言ってた。許してね、順平のこと」

「……いえ、理由あるなら、仕方ないですし」

襲われた、ときけば心中穏やかではないのは確かなのだが、それよりも何よりも健太郎は今、他のちゆみの言葉に打ちのめされていた。

不謹慎かもしれないが、千枝が襲われたことよりも、順平が怪我をしたことよりも、そっちのほうが健太郎には重大なことだった。

健太郎はちゆみから顔を背けると、気にしていないとだけ告げて、ちゆみに歩くよう促す。

ちゆみはそれを怒っているととったらしいが、そんなわけはない。そんな理由があるところに怒りを覚えたならばそれは、人でなしというものではないか。

順平（ひと）のもの、か……

『許してね、順平のこと』

彼氏のことを許してあげて欲しいということか――ただ健太郎は、ちゆみにそれを言われたことが、無性に辛かった。

12　身体で返しなさい

「ベッドは私のベッドで二日ほど我慢していただくとして、次はベッド見に行こうか」
「ええ？！何言ってるんですか？」

私のベッドをってどういうことなの！？と仰天している健太郎に、ちゆみはさらりとこんなことをのたまう――仕事の時間が君とずれれば寝れるから大丈夫、だそうである。
どういうことかと訝れば、何のことは無い。

「私は物書きだからね。昼間寝て、夕方くらいから起きて家事やってってやればやれなくはないよねって」
「はあ、なるほど……じゃなく！！なんで俺があなたのベッドを使うんですか！？」
「え？だって今日から君、暫くうちに泊まるんだから当たり前じゃない。ベッド届くまでは仕方ないでしょ？ソファじゃ辛いだろうから。あ、でも安心してね。私のダブルベッドだから。寝心地ばっつぐん！」
「――わー、それはうれしい……ってうれしくねえええ！」

あれすっごく寝心地いいんだからねと言うちゆみに、なんだか話しが素っ飛びまくっていますよねと、落ち着いて話しあいたいんですがと健太郎はくらくらする頭を抱えて話しをしようと試みる。
なんとも悲しい話しであるが、ちゆみは根本的に相手に言葉を伝える能力が欠けているように思えた。
そもそもいつ俺があんたの家で寝泊まりする話しになったんだと

言いたいが、そんなことよりもちゆみは別のことが気になるようだ。
「……え、傷つく。私のベッドじゃ寝れない？やだ、私臭うとか？よく他の人の体臭がついてると寝れない人もいるけど、私が臭いとかってそういうことだとしたらショックだな」
「いやいや！そうじゃなく！」

むしろいい香りがしそうで寝れねえよ！と言いたいのだが、ちゆみはしょんぼりとしながら今日中の発送を出来るだけして貰えないか交渉しようかと言う。

ああもう畜生、天然め！

「だから、なんで俺は沢地さんの家に泊まる話しになってるんですか！？お、おかしいっすよね！？」
「おかしくないない。そもそも君のところの社長さんとも交渉済みだし、オッケーオッケー」
「俺との交渉しませんの？！」
「……君はある意味では売られたようなものか」
「そうなの！？」
「あはは、冗談」
「笑えませんよ！」
「宿泊費用は要らないよ。そのかわりに身体で払ってくれれば」
「かか、身体ぁ！？おおお、俺の身体目当てですか！？っていうか払います！っつか、こんだけ迷惑かけてなんですか！払わせてもらえなかったら俺どんだけ駄目人間！？」

というよりもだが、身体、身体が目当て？――そんな馬鹿な。だってちゆみはどう見ても清純、潔癖を絵に描いたようなイメージだ。まかり間違ってもあんなことやこんなことをしでかしそうにないと

いうのに。
けれど出てきた言葉はこれである。
「うん。身体で払って貰っていいからって社長さんのお墨付き。だから今日から君、私のところで身体で返すんだからね？」
「え、いやいやいやいや！なに言ってるんですかあんた！？」
ええええ、エロか、エロなのか！？と社長あんた何してるんだよと心の中で絶叫したあとに、健太郎の中の漢と書いて男と読むもう一人の健太郎が囁いた。
『いいじゃねえか、この際だからたっぷりと楽しめよ』
『け、けど！』
『むしろ向こうから言ってるんだぜ？』
なんて会話がなされ始まった途端だ、ちゆみが早くもそれをかち割ってくれた。
にこやかな笑顔でちゆみが手に持った健太郎の服の入った袋を軽く持ちあげふふっと笑うとこういった。
「スーパーの買いだしとか、一人だと大変なんだ。男手増えると助かる！嬉しいな！」
「……少しでも期待した俺がバカだった……」
ちょっとそっち展開が欲しかったなんて、言うだけ罰あたりなんだろうけど。
そういえばと振りかえりざま言われたのは、背のことだった。

「私はヒールを足して身長が百七十三センチなの。君いくつなの？」
「えっと……百八十九？靴底足せば九十こえます」

それを聞いた途端、ちゆみは笑顔で健太郎のつま先をまたも踏みつけてきた。

「いだだだだだっ！痛いです！痛いっ！痛いって！」
「憎い！憎い！！」
「なんっ、踏まないで！足が！あだだだだっ！」

そして踏むだけ踏んで満足したのか、ちゆみはベッドコーナーへと向かうとそこでぐるりとベッドの平原を見渡して、君寝れるのないような気がするねとずばり言った。

「そりゃまあ」

普通のサイズでおさまるほどの体格じゃ御座いませんが。
健太郎が申し訳なさそうな顔をしていれば、ヘイマスターとばかりにちゆみが店員を呼びつけて話し始める。

「キングサイズのベッドってありますか？」
「ええ、御座いますよ。こちらになります」
「済みません」

あるところにはあるものねー、なんて微妙に女めいた口調で言いつつ健太郎がついていくと、そこには三つほどキングサイズの大型ベッドが置いてあった。

「これ、寝そべってみてよ。寝れそうなら買うから」
「ああ、はい」

因みにこれは即決即買いだった。サイズが合うからってそんな馬鹿な。お値段がちょっと恐ろしいものでしたが本気なんですかと、思わず健太郎が念を押してしまうほどにはそれはそれは凄い値段だった。

ちゆみの懐がブラックホールの如く全てを飲み込んでいく様はある意味では圧巻。ある意味では――つまりは今の買い物を全て現金で購入していることに据え恐ろしさを覚えたのだ。

だが、それと同時に健太郎は無性に申し訳なくて堪らなくなっていた。

だって凄いお金だったよ！！

キングサイズのベッドともなると、矢張り大きいものはお高い。となるとその金額を見て、別のベッドの金額を見て、くらりと眩暈を感じたのは何も健太郎の罪ではないはず。

「た、たかっ！たっか！！」

「まあ仕方ないよね」

「いやでもたっけえ！」

「さ、お茶碗もお客さん用じゃあれだから、君の買うから、選ぶよー」

なんだか本格的に同棲を始めます、みたいな感じになってきたなあとどぎまぎとしていれば、ちゆみはほら早くと健太郎をせっつく。

見れば健太郎とちゆみとの間にはいつの間に出来たのか、距離があいている。手を伸ばして早くこの手をとれと促してくるのが当たり前のことのようにしてくれるのが、なんだか堪らなく気恥ずかしくて、そして堪らなく嬉しかった。

健太郎はちゆみの伸ばされた手をそっと握ると、ちゆみがその大

きな手をぎゅっと握り返してくる。たったそれだけのことがなんだか、嬉しかった。

「早く行こう。この後スーパーで特売なんだ。遅れたらどうするの」
「ほ、本当に荷物持ちなんですね……」
「というよりも、数が増えると助かるんだ。おひとり様限りって増えてきたからさ？本当にうれしい。さ、頑張ろう」

13　今日からワンコ君

結局自宅に戻ってからじゃないとどこにどんな耳があるか分からないと、詳しい話しはほとんどちゆみの口から語られることはなかったが、では帰宅してから――となったらそれからが凄かった。本当に凄かったのだ。

玄関扉を開けるなり一言。荷物はそっちの部屋が空き部屋だからそこでいいよね？――と、ここまでは良かったのだ。

「――だから、君のところのマネージャー、あれうちの弟なの」

「か、かか、かかあか、川治さん！？」

「ああそうそう、私、沢地ちゆみってペンネームね。本名は川治ちゆみ。ちゆみは一緒なの。だから面倒だからちゆみって呼んで？」

「いや、その、あの、……はい」

同じ川治同士じゃ被るよねーと言いつつちゆみはジャケットをソファへと放り投げ、肩を回すとやっぱり着ない方が楽だなどと呟きながら食器を丁寧に取り出し始める。

床の上でタイトスカートで正座をしているちゆみの足が、立っている時とは違い、太ももの中ほどまでが覗いて見えて、思わずごくりと健太郎は喉を鳴らした。

っていうか、こ、いびとじゃ、ない！？

順平との仲を振りかえると、そうか、だからああまで仲がよく、砕けた口調だったのかと思い、心の中で喝采を上げた。

顔があまり――今思い返せば多少なりと似通っている程度だが似てはいるだろう――似ていないから姉弟という考えが完全になかったが、そういうことだったのかと勘違いが解けた途端に嬉しくて堪

らない。
けれどそれだけでは足りず、健太郎はちゆみに割り振られた部屋までいくと、ガッツポーズを決め――と、ちょうどいいからと部屋の中をぐるりと見回した。
そこは八畳はあるかという少々縦長に見える部屋で、押入れとクローゼット、それとコンセントの刺し口が四箇所もあることを確認すると、凄いなと感嘆のため息を零す。エアコンまでついていて、なんともいたせりつくせりである。
本当にこんな部屋を借りれるというのだろうか。

こりゃ流石にちゆみさんの言う通りタダじゃまずいって。

これでは確実に都内では五万先はするようなお値段だろうと思われる部屋だ。それもこの部屋のみでもそれくらいするだろう。なんせ都内でも交通の便が大変良い場所である。これでこの一軒家だ、総額でどれくらいするのか、訊ねることすら恐ろしくて出来やしない。
シェアハウスだとしても月額四万程度はいくのではなかろうか。それも、部屋代のみで。
ちゆみはそのことをきちんと認識しているのだろうか。今までの発言からみて、可也怪しいと思った。

「お値段の交渉くらいはさせていただこう……」

ちゆみでは話しにならないから、そうだな、順平と話すべきだなと思いながら廊下へと出た。
廊下は手すり付き、部屋との間に境が無いのを見ると、この家はバリアフリー設計かと唸る。これでは相当高いはずだ。
部屋から戻った健太郎に、ちゆみは食器を棚の中に入れながら訊ねた。気にいったかと。

「そりゃ勿論！っていうか、その、なんていうか……まだ良く分かってないことだらけだし、社長からとか言われても全然実感わかないしですけど、その、……宜しくお願いします！」
「うん。宜しくね。あとはそうだなあ……一階は後トイレと……そうだね、お風呂とかも見てくるといいよ。一階部分はそんなだけど、二階と三階はまたちょっと違うしね。手持無沙汰だろうし、見てきていいよ」
「あ、はい！」

ちゆみの建てたこの家屋、外観からでも直ぐに分かるように三階建ての建物だった。これで小さいながらも庭まであり、バリアフリー設計の人に優しい作りをしているのだから、どういった意図で建てられたものなのか、推してはかるべしというところか。健太郎がもしかして親御さんと同居するために建てたものだったのかなと考えていれば、ちゆみはそのことに触れてくれるなというわけではないのだろうが、突っ込んで訊ねられるよりも早く健太郎に向けて質問を飛ばした。口を挟める余地がなかった。

「えっと、その前に君のことは何て呼べばいい？本名の久保君？それとも芸名の林田君？」

名字が嫌いで下の名前で呼んで欲しければそう言ってと言われ、健太郎は思わず叫んでいた。

「け、んたろうで！」

別に名字が嫌なわけではないけれど、健太郎は名前で呼んで欲しかった。
ほとんど初対面の間柄で何をとも思うし、本来名字呼びが普通な

のも分かっていた。けれど順平も名前で呼ばれているし、自分も、というのは愚かな考え方だっただろうか。
姉弟相手に何をとも思うが、それでも健太郎は咄嗟にそう答えてしまっていた。
言った後で後悔をしている健太郎に、ちゆみは何を言うわけでもなく即座に了承した旨を返す。

「分かった。健太郎君ね、宜しく」
「はいっ！」

元気よく返事を返してきた健太郎に、ちゆみは内心「犬みたいな子だなあ」なんて考えていたのだが、それは口には出さなかった。
ただ、

「私、大型犬飼いたかったんだよね」

と言ってしまったので、台無しではあったが。

「大型犬？俺の実家ででかいの飼ってましたよ。グレート・ピレニーズっての。分かります？」

たぶんちゆみよりも重いはずだろうと、その圧し掛かられた時の重さを思い出して口に出してみれば、ちゆみは目を丸くしてこういった。

「おっきいんだね。でも……もっと大きいの飼うからいいや」
「？」

大型犬改め、大型ワンコ君を、だが。

１４　同居人受け入れは二人目なんだ

「――でもおっかしーなあ、二人ともまだ帰ってないなんて……」

先に戻っているはずなんだけどとちゆみは首を傾げているが、健太郎としては居てくれない方がいい。もう少しでいいから二人きりの時間を満喫していたかった。

「ああそうそう、クローゼットとかは部屋にあるの適当に使って貰うとしても……ベッドだよねえ。……私のベッド向こうだけど、一通り見終わったら戻ってきて。案内するから」

「え……あ、はい」

ちゆみの寝室に案内して貰えるということもあってか、一気にゆでダコのように顔を真っ赤に染め上げると、健太郎はぎくしゃくとしたまま家中を探索に出向く。

その間に見つけたものが、二枚の札である。

一枚は鈴の絵が書かれた札で、「ちえ！」と書かれている。

「この鬱陶しい癖のある字は……」

大変見覚えがあった。

そしてもう一枚はというと、綺麗にデザインされた流麗な字体で、「ＪＵＮ」と書かれていた。

「こっちは川治さんかな？」

これは開けたらいけない扉のような気がして、健太郎はそれら二部屋には触らずリビングへと戻った。
リビングに戻ればちゆみが荷物を一つ一つ開封を終えたらしく、健太郎のためにと買ってきたばかりの衣類を丁寧にハンガーにかけて割り当てた部屋へと持っていくところだった。

「あ、俺やりますよ」
「いいよ。疲れたろうから座ってて。お茶出したから。……あ、お茶で良かったかな？」
「え？あ、はい！お、お茶大好きです！」

首をこてんと傾げられればあまりの可愛らしさに全力で答えてしまう。そんな健太郎の様子に違和感を抱くでもなく、ちゆみは健太郎の部屋へとそれらを抱えていった。
お茶を飲んでひと息をついたら近所のスーパーだそうだ、また二人きりで外出らしく、早くも健太郎は緊張をしてきた。ちゆみは相手がほとんど知らぬ男ということを分かっているのかいないのか、緊張というものをどこか置いてきてしまったような態度だというのがこの両者の間の反応の大きな違いというものだろう。
流石に俺は何をしているんだと、ちゆみのそんな完全に健太郎が眼中にありません！といった態度を見て健太郎は落ち込んだ。
こんな温度差――これではあまりにも道化過ぎるではないか。

「かっこ悪ぃ……」

けれどそんな自分が嫌いではないのだ。
それは今という時が、彼にとってこれがどれほど貴重な時間かを物語っていた。

荷物を粗方片付け終わると、ちゆみと少しだけだけどと話し合いの時間を持つことになった。
適当な茶菓子として出されたものは手製のカップケーキ。それもチョコレートチップとココアパウダー入りの少し苦めにつくられた大人向けの味だ。緑茶とはあまり合いそうにないこれが、不思議と緑茶によく合った。
ほろりと口の中でほどけるような食感に、ほどよい甘さ。そして柔らかな甘い香りが鼻腔を抜けると、なんだか人心地ついたのか、健太郎は少しだけ泣けてきた。
目の前で自分よりも大きな身体の男が目じりに涙を僅かにためている姿を見て、ちゆみは視線を逸らすでもなしに不思議そうにこう訊ねた。それは当たり前のことを指摘しているようにも聞こえ、健太郎は不愉快にならなかった。下手をすれば泣いちゃうの？と馬鹿にされたようにも聞こえるその台詞が、すとんと胸の中におりてきて、じわりと広がる。

「――泣く？」
「い、いえ。大丈夫です、から……」

良く考えてみるとこれが健太郎の仕事を終えてから初めての水分だ。水を口に含んだところでそれに刺激を受けたわけではないのだろうが、このちゆみの居住空間の温かな空気に触れて、ようやく泣けるようになったのかもしれない。
鼻を啜って涙を堪える健太郎に、ちゆみは笑うでもなく、悲しそうな目を向けるでもなく、無表情にその頭を引き寄せ、抱きしめた。
「馬鹿ね。泣けるようになったんなら泣く方が余程楽に決まってる」
不安で堪らなくなったって仕方ないところ、君は良くついてきた

よとちゆみに言われれば、堰き止めていた涙がぶわりと溢れ出て、健太郎の頬を伝った。

放火の上に自宅に侵入者があったかもしれなくて、その現場検証だって実際のところ、健太郎には実感なんてもんは皆無だった。

警察も消防も、あくまで一般的な生活をしていればではあるが、そうまで付き合いがあるほうがおかしい職種だ。それを今日という日は嫌というほど付き合った。これで緊張をしていないほうがおかしいほどに。

ちゆみが嫌に場馴れしているように見えたことが健太郎にとってみれば何故という疑問だったが、それでも彼女が居てくれて助かったというのが正直なところだろう。

それこそちゆみが居てくれなければ、話しなんてちっとも進まなかったに違いない。

銀行だって、保険だって、全然わけが分からない。初めて過ぎて、何それ？どうしたらいいんだよと、ただただあたふたとしていただけだ。

健太郎が落ち着くまでただ胸を貸してくれていたちゆみに、なんだか悔しさも感じる。

今日一日――いや、まだ半日もたっていないが、そんな短い時間の間に何度健太郎はそう感じたことだろうか。

ちゆみは健太郎よりも――他のどんな男よりも余程男らしい。

男らしい、というよりも、頼りがいがあり過ぎるのだ。

ずるいわ、この人。

勝てねえよ。

最初は単にどこか近寄りがたい空気を放っていて、見た目もそうだが中身も相当なんだろうと感じてはいた。他の人とは違う――ただただ異質であると感じていたけれど、健太郎はただその空気と眼鏡の奥の瞳に惹かれていただけだった。

けれど今は恐らく違う。

「――ちゆみさん、男前過ぎます……」

「どこがって言いたいんだけど、それ良く言われるからなあ……なんでだろう？」

鼻を啜りながらちゆみに抱きしめられるままに健太郎は思った、今はちゆみにパートナーがいるかなどと問わないし、問いたいとも思わない。ただこうして今は、胸を借りて慰めて貰えるだけで十分だ。夢は夢のまま、今はこのままで居たい、そう思った。

胸の上にあったぬくもりが離れていくと、少々寂しいと感じるのは気のせいなのか――ちゆみはそんな気持ちを押し隠して、少しだけ目じりを赤く染めた健太郎の顔を見て、少しはすっきりしたみたいだねと言うと、その短く整えられていた髪をくしゃくしゃにしてやってから、先日ここに居た千枝のことについて語り始めた。

これから一緒に暮らす以上、最低限、ここに住んでいる人間のことを語るのは当たり前のことと考えたからである。

――それは、順平の携帯電話が突如としてぶつりと切れたことに関連する、信じがたい話しだった。

「――千枝ちゃんがなんで居たのか前聞いてきたっけ？」

「え……ああ、はい。あいつ、どうかしたんですか？」

健太郎からすれば、まさかちゆみと付き合いがあるとはつゆ知らずということだったのだが、あいつも交友関係広いんですねなんて健太郎がお茶をひと啜りしながら言えば、違う違うと顔の前で手をひらひらと振る。

「そりゃまあ今は友達かもしれないけど、最初は健太郎君と同じだよ。今うちに寝泊まりしてる子なんだ。預かってるっていうか……もうこれ同居よね。あとで千枝ちゃんと順平からそっちの説明はあると思うんだけど、このことについては、健太郎君とこの社長も知ってる話しなんだけどね……」

健太郎と千枝は同じ事務所所属の声優である。千枝の場合は少々その趣が異なる職種で、アイドル路線を多少とっているためまた違うのだろうが、ほとんどその活動内容は同じだった。

「あの子のマネやってるのがうちの弟で、健太郎君もその一人でしょ？」

「ええ……まあ」

それは認めがたいが声優同士のマネージャーが被るのは仕方ない。それだけ今の声優業界が人であふれかえっている証拠でもあるのだろうが、千枝と、というのはあまり嬉しくはなかった。

ちゆみは健太郎が渋々といった様子で頷くのを見ながらくすりと笑うとからかうように言った。

「ほんとに千枝ちゃんと仲悪いんだね。聞いてはいたけどそんなにしかめっ面になるなんて」

ちゆみに指摘され、健太郎は慌てて違うと返したものの、信じられてはいないようだ。

「別にいいって。仕事に向かう姿勢から対立しているみたいって聞いてたから……そういうの無い方が人間味薄いしね。仲悪いのはいいとは言わないし付き合いにくいのもあるだろうから良くないなって思いはするけど、それでもそういう理由からの対立なら仕方ない

と思うよ？」

慰める様にちゆみがそう言えば、健太郎は言葉に詰まった。

「いや、その……」

何も言えなくなった健太郎に、ちゆみは無言で立ち上がると、財布とエコバッグを二つ抱えて健太郎の腕を引く。

――この話しは鬼門な気がした。誰が、と問われればちゆみにとって、だろうが。

「……じゃ、いこっか。買い物」

「あ、はい！」

対立が出来るほどにその仕事に向かって真正面から向き合っている健太郎に、ちゆみは自分はどうなのだろうかと考えてしまう。

私は、ちゃんと真正面から立ち向かえているのかな？

答えは中々出てこなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7084z/

声優回収寮

2012年1月8日20時50分発行